PROGRAM

10月18日(木)

12:00 受付
13:00 開会式
13:20 記念講演「三浦家の健康長寿の秘密」
三浦 豪太(登山家、プロスキーヤー、医学博士)

14:00 第一部 日本温泉首長サミット会議「地域で活かす温泉ー官民連携の取り組み」
コーディネーター: 合田 純人(健康と温泉フォーラム常任理事)
パネラー: 田中 清善(新潟県 阿賀野市長)
石田 耕太郎(鳥取県 倉吉市長)
工藤 栄光(北海道 豊富町長)
松浦 弘幸(鳥取県 三朝町長)

15:15 休憩
15:30 第二部 市民フォーラム「地域で活かす温泉ー生命と地域遺産の学習」
コーディネーター: 荒木 咲子(村杉温泉 長生館女将)
発表者: 阿賀野市立笹岡小学校4年生

16:45 全国有名温泉地宿泊券他抽選会
18:30 交流レセプション(村杉温泉長生館)
21:00 終了
五頭温泉郷(村杉、出湯、今板温泉泊)

10月19日(金) 新・湯治セミナー

6:00 朝湯会(ラムサール条約登録湿地・瓢湖白鳥見学)
9:00 環境省共催 新・湯治セミナー「地域で活かす温泉ー新・湯治プロジェクト」
基調講演:「地域で活かす温泉ー新・湯治プロジェクト」
山本 麻衣(環境省温泉地保護利用推進室長)
パネルディスカッション
コーディネーター: 坂本 誠(健康と温泉フォーラム専門委員)
パネラー 山本 麻衣(環境省温泉地保護利用推進室長)
荒木 善紀(新潟県五頭温泉郷旅館協同組合理事長)
遊佐 久則(宮城県鳴子温泉郷川渡温泉観光協会会長)
阿部 公和(山形県湯野浜温泉亀や旅館社長)
11:10 総括講演「統合医療と温泉の可能性」
高山 真(東北大学病院総合地域医療教育支援部・漢方内科、温泉療法医)
11:50 閉 会 式
12:00 専用送迎バス 1新発田駅行き
12:10 専用送迎バス 2新潟駅経由新潟空港送迎

10月20日(土) 関連事業(於:山形県湯野浜温泉)

8:00 第7回日本の名湯百選連携会議
11:30 「地域で活かす温泉ー各温泉地報告」

特定非営利活動法人 健康と温泉フォーラム

NPO 法人健康と温泉フォーラムは、医療・環境・施設等、温泉保養地に関わるあらゆる専門家によって 1986 年に設立された非営利団体です。その活動は、温泉の健康利用促進の啓蒙・普及活動はもとより、心身ともに健康で幸福な生活（Well-being) をおくるための温泉保養地づくりに必要な「環境・施設・プログラムづくり」に関する様々な国内外の情報の提供や政策提言等を通じて健康で活力ある社会の構築に貢献する事を目的として活動しています。

The Forum on Thermalism in Japan

健康と温泉フォーラム2018in阿賀野市

地域で活かす温泉ー
生命と心のサンクチュアリー、温泉新時代へ

2018年10月18日(木)、10月19日(金)
阿賀野市ふれあい会館 (新潟県阿賀野市山崎77)
関連事業:新・湯治セミナー(環境省共催)
第7回日本の名湯百選連携会議
(10月20日 山形県湯野浜温泉)

健康と温泉フォーラム2018in阿賀野市実行委員会
特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム

CONTENTS

1.主催者挨拶　三友 紀男　(NPO法人健康と温泉フォーラム会長).....1

2.歓迎挨拶　花角 英世　(新潟県知事)

3.後援者挨拶　牧野 直樹 (一般社団法人日本温泉気候物理医学会理事長)..2
栗原 茂夫(一般財団法人日本健康開発財団理事長)
岡田 友悟(NPO法人 日本スパ振興協会理事長)
野中 ともよ(NPO法人ガイア・イニシアティブ代表)

4.記念講演「三浦家の健康長寿の秘密」 5
三浦 豪太(プロスキーヤー、医学博士)

5.第一部「日本温泉首長サミット会議」「地域で活かす温泉ー官民連携の取り組み」
ファシリテーター 合田 純人(NPO法人健康と温泉フォーラム常任理事)
プレゼンテーター 田中 清善　(新潟県 阿賀野市長)..... 6
石田 耕太郎(鳥取県 倉吉市長)
渡辺 英子　(山梨県 北杜市長)
江頭 実　(熊本県 菊池市長)
首藤 勝次　(大分県 竹田市長)
工藤 栄光　(北海道 豊富町長)
松浦 弘幸　(鳥取県 三朝町長)
宮元 陸　(石川県 加賀市長)

6.第二部 市民フォーラム「地域で活かす温泉ー生命と地域遺産の学習」 14
コーディネーター 荒木 咲子(村杉温泉 長生館女将)
プレゼンテーター 阿賀野市立笹岡小学校４年生

7.第三部　新・湯治セミナー「地域で活かす温泉ー新・湯治プロジェクト」 15
基調講演　「地域で活かす温泉ー新・湯治プロジェクト」
山本 麻衣(環境省 温泉地保護利用推進室長)
パネルディスカッション
コーディネーター 坂本 誠　(NPO法人ローカル・グランドデザイン理事)
プレゼンテーター 荒木 善紀(五頭温泉郷旅館協同組合理事長)
遊佐 久則(川渡温泉観光協会会長)
阿部 公和(湯野浜100年株式会社取締役)

8.総括講演「統合医療と温泉の可能性」 22
高山 真(東北大学病院 漢方内科医局長)

9.特別寄稿「五頭温泉郷の「温泉発見・開湯伝説」と次なる課題」 23
前田 勇 (立教大学名誉教授)

【後援】環境省、厚生労働省、国土交通省、全国市長会、全国町村会、新潟県、地域活性学会,(一財)日本健康開発財団,
(一社)日本温泉気候物理医学会・温泉療法医会、NPO法人日本スパ振興協会、NPO法人ガイア・イニシアティブ
新潟日報社、NHK新潟放送局、BSN新潟放送、NST新潟総合テレビ他

三友　紀男

みとも　としお

NPO法人
健康と温泉フォーラム会長
ラジウム・ラドン温泉を利用した
健康日本推進連絡会議委員長
仙台社会保険病院名誉院長

主催者挨拶

昨年秋の霊峰伯耆大山の麓の出湯関金温泉に続き、本年の健康と温泉フォーラム2018 in 阿賀野市を、五頭連峰の山麓にあり弘法大師開湯と伝えられる出湯３泉（出湯温泉、今板温泉、村杉温泉）からなる五頭温泉郷で、地元実行委員会とともに開催いたします。

2013年に「ラジウム・ラドン温泉広域連携による地域活性化」をテーマにここ阿賀野市で開催してからもう５年になります。その間ラジウム・ラドン広域連携に加わる温泉地で順次開催してまいりましたが、この５年間に、ラジウム・ラドン広域連携の温泉地だけではなく、広く健康や介護・福祉に地域の健康資源として温泉の利活用を模索する全国の温泉地の参加が増え、温泉利用型健康増進施設の認定条件緩和や医療費控除の拡充を実現するなど、温泉に関わるいくつかの政策提言を行い一定の成果を得ることができました。東日本大震災とその後の原発事故による風評被害を払拭し同じ泉質を持つ温泉地の連携を図ったこのラジウム・ラドン温泉広域連携の役割は一応の目的を終え、この温泉地広域連携を土台に、新たなネットワークを構築して日本の温泉地のさらなる発展にいかに寄与していくか、今後の大きな課題と期待が見えてきたように思われます。国が進めるナショナルブランドとして「新・湯治プロジェクト」を見据えながら、温泉地の官民連携、温泉地同士の広域連携に加え、産官学の立体的な連携はもとより、企業や市民を巻き込み、すべての国民が温泉の恵みを享受できる社会的な仕組みを持った「健康温泉都市」育成を目指すターニングポイントにきているように思います。さらに、温泉国日本の伝統的温泉文化の国際的発信にも積極的に取り組むことも課せられていると思います。

この時期に当阿賀野市において「地域で活かす温泉-生命と心のサンクチュアリ-温泉新時代へ」をテーマに2018年のフォーラムを開催いたしますことは誠に意義深いものがございます。多くの成果が実ることを期待し、それがご参会の皆様が活躍される全国の地域において行かされることを願うものでございます。フォーラムの中核をなす連携温泉地は、本フォーラムが選ぶ日本の名湯百選や、環境省の認定する国民保養温泉地と重複して認定されています。皆様の今後一層のご指導、ご支援、ご協力をいただきますようお願いいたします。

最後になりましたが、今回のフォーラムを開催するに当たり、ご後援を頂いております環境省・厚労省・国土交通省・新潟県をはじめとする諸機関・諸団体に心からの感謝の意を表すとともに、地元、阿賀野市や実行委員会の活動に深く敬意を表して主催者のご挨拶といたします。

花角 英世

はなずみ　ひでよ

新潟県知事

昭和33年生
昭和57年3月 東京大学法学部卒業
　　57年4月 運輸省入省
平成20年7月
国土交通省総合政策局観光政策課長
20年10月　観光庁総務課長
23年8月　大阪航空局長
24年9月　大臣官房審議官
25年4月　新潟県副知事
27年9月　海上保安庁次長
30年6月　新潟県知事選挙初当選
新潟県知事就任

歓迎挨拶

「健康と温泉フォーラム２０１８ in 阿賀野市」が当地において開催されますことを心よりお祝い申し上げますとともに、全国からお集まりいただきました皆様を心から歓迎申し上げます。

本県は、約635kmに及ぶ海岸線と標高2,000m級の山脈に囲まれ、中間には信濃川、阿賀野川など多くの河川や広大な越後平野の他、トキの生息する佐渡島を持つなど多様で豊かな自然環境に恵まれています。また、県内の30市町村で温泉が湧出しており、宿泊施設を有する温泉地数では全国第3位の豊かな温泉資源に恵まれた地域でもあります。

本フォーラムの開催地である阿賀野市の五頭温泉郷は、弘法大師が1,200年以上前に開湯したと伝えられる県内最古の温泉地と言われており、五頭連峰県立自然公園に指定されている五頭山の麓にあります。
このため、山岳信仰と結びつき古くから湯治場として栄え、その周辺には自然を活用した施設や遊歩道等が整備されていることから、保養、休養、健康増進を目的に多くの宿泊客が訪れています。

また、五頭温泉郷は、環境省の国民保養温泉地に指定され、周辺の自然と調和しつつ地域の歴史と文化を活用しながら、地域特有のラジウム・ラドン温泉の普及や保養・休養を中心に健康増進及び生涯学習の場として利用を推進し、魅力ある滞在型温泉地を目指しております。今回のフォーラムを通じて、地域の特性を活かした温泉地の益々の活性化につながることを願っています。

今、新潟は実りの秋を迎えています。コメどころ新潟が誇る新米やおいしい酒、豊かな山・海の幸、紅葉にそまった山々の景観など、五頭温泉郷とともに新潟の魅力を存分に堪能していただきたいと思います。

結びに、本フォーラムの開催に多大なご尽力を賜りました関係者の皆様方に敬意を表しますとともに、ご参加の皆様のご健勝、ご多幸を祈念し、あいさつといたします。

後援者挨拶

牧野 直樹

まきの　なおき

一般社団法人
日本温泉気候物理医学会理事長

昭和49年 京都府立医科大学卒業
九州大学医学部循環器内科入局
平成16年 九州大学
別府先進医療センター長
平成21年 九州大学病院
別府病院院長
平成25年 九州大学名誉教授
平成29年 現職

「健康と温泉フォーラム 2018in 阿賀野市」が開催されますことを心よりお祝い申し上げご挨拶を申し上げます。

阿賀野市には効能高い放射能線である天然ラドン温泉を有する五頭温泉郷が有名であります。そこは歴史を持つ温泉として知られ、2016 年には「国民保養温泉地」に指定されています。一般には放射能泉は大量使用すると有害であるが、少量の場合は、逆に体によい刺激を与えて、免疫機能を高め、関節リウマチ、変形性関節症、筋肉痛、神経痛などでの鎮痛効果があるとされています。

最近では健康寿命の延伸効果があるのではと言われています。日本は世界有数の長寿国ですが、その要因の一つとして入浴による温浴習慣も言われています。湯船に体ごと漬かる温浴により、熱ショックタンパクが増え、老化予防につながることが明らかにされています。人は生きていく上で、老化を避けられませんが、誰もがいつまでも若々しく、健康な状態で歳を重ねたいと願っています。のんびりと天然温泉の湯船で過ごし、宿自慢の味覚に舌鼓を打てば日頃の疲れも癒されていきます。

日本温泉気候物理医学会は従来からの温泉・気候・物理療法を中心として研究を行っていますが、これらの非薬物療法は超高齢社会においてその役割は増加する医療費や介護費の抑制にも期待が持たれています。

私どもは医療の一翼を担う温泉気候物理医学の発展を目指すとともに、国民の健康増進、温泉などの自然資源を活用した町興し、さらにはインバウンドも考慮したニューツーリズムの推進など、新たな分野に向かっても行動していかなければなりません。現在、全国の温泉地では温泉資源の新たな活用に向けた様々な試みが行われています。全国の温泉地を持つ市町村に発信しより広域な温泉連携による地域活性化を期待するものでもあります。環境省が提言する『新・湯治』では温泉の効能のみならず、温泉地全体での療養効果等を科学的に把握し、その結果を全国的な視点に立って情報発信するとされています。全国の温泉地が連携してデータを蓄積・評価・公開する仕組みづくりを挙げています。私たち日本温泉気候物理医学会においても温泉の持つ効果について更なる科学的エビデンスを構築する必要があると考えています。

本日、「健康と温泉フォーラム 2018in 阿賀野市」が開催され、活発な意見交換が交わされ、国民の健康増進がますます高まることを期待しております。最後になりますが、本フォーラム開催にご尽力賜りました開催実行委員会並びに関係各位の皆様に敬意を申し上げ挨拶にしたいと思います。

後援者挨拶

栗原 茂夫

くりはら　しげお

一般財団法人
日本健康開発財団代表理事 理事長
温泉利用指導者、温泉入浴指導員

日本の高齢化は、世界に例を見ない速度で進行しております。いよいよ本格的な超高齢化社会が実現しつつある中、これに伴う医療費の増大への適切な対応を図るため様々な医療制度改革の推進が喫緊の課題となっております。また一方で、「健康で豊かな老後を過ごしたい」といった国民の健康への関心は益々高まり、従来にも増して健康づくり・健康増進に対する社会的要請が強くなってきております。

当財団の主要業務の１つであり、制度開始から四半世紀を迎えた厚生労働大臣認定「温泉利用型健康増進施設」の認定申請においては、近隣の別個の温泉及び運動施設が一体運営されていれば良いよう認定規定の緩和が図られ、昨年７月に北海道豊富町・大分県竹田市にて新制度第一期として認定を受け、成果を挙げています。昨今の健康に対する関心の拡大に伴って、健康増進施設に関する問合せや認定申請依頼は増加傾向にあり、自治体等における温泉の研究、実験等の問合せや依頼も増えております。

また、環境省の「平成 29 年度地域資源を活かした温泉地活性化に関する調査業務」では、当財団の温泉研究の経験から、温泉利用の効果測定調査に向けた実施モデルの提言を行いました。今年度は、従来の温泉地での過ごし方から、温泉入浴に加え、周辺の自然等を活かしたプログラム等を楽しむことを通じて、現代人のライフスタイルに合った温泉地での過ごし方を提案する環境省「新・湯治」効果測定調査プロジェクトに主体的に関わる等、温泉地活性化に関しても積極的な対応をしております。

更に、人材育成に関しましては、厚生労働省の定めた実施要領に準拠し、昨年度末までに温泉利用指導者（累計 481 名）・温泉入浴指導員（累計 5,389 名）を養成しています。これらの方々は、「健康増進のための運動・温泉利用プログラムを適切に提供する能力」を有すると認定されていますので、国民の健康増進の牽引役としての活躍が期待されています。

一般財団法人日本健康開発財団は、「温泉医科学研究所」にて温泉・入浴等を活用した健康作りや保養システム等の研究・開発・普及を進め、健康増進・回復に貢献すべく活動しています。また上記のとおり、人材の新たな育成に関わる講習会の実施も継続していく所存です。更に昨年度から㈱ＪＴＢより、訪日外国人受診者・患者の受入・連携及びコンサルティング等を推進する「ジャパンメディカル＆ヘルスツーリズムセンター」及びヘルスツーリズムに関するコンサルティングを行う「ヘルスツーリズム研究所」を受入れ、温泉医科学研究所との融合を進めながら発展を目指しています。

人類の貴重な資源である温泉の正しい健康活用と地域の発展・活性化を推進することは、大変意義深く、大きな注目を集めています。高齢化が進む住民一人一人が、安心して生活を送れるよう、有機的なネットワークを構築し、新たな温泉の可能性を考えていけたら、こんなに素晴らしい事はないと思います。その中心的な役割を果たしていくのが、ＮＰＯ法人健康と温泉フォーラムであると確信しています。

1958 年東京生まれ。
筑波大学比較文化学類卒業。
1980 年日本交通公社（現ＪＴＢ）入社。宇都宮支店長、ＪＴＢ関東常務取締役を経て、2012 年より現職。

ＮＰＯ法人健康と温泉フォーラム理事、ＮＰＯ法人日本ヘルスツーリズム振興機構理事、（一社）Medical Excellence JAPAN 理事、（公財）日本交通公社監事
（公財）日本修学旅行協会監事等を兼職

後援者挨拶

岡田 友悟

おかだ　ともあき

特定非営利活動法人
日本スパ振興協会理事長

1960年東京生まれ
化粧品関連の商社、温浴関連ビジネスに勤務、各種温浴施設・スパの立ち上げにかかわる。その後スパ振興協会の立ち上げに参加、スパの啓発活動に従事する。
現職　特定非営利活動法人
　日本スパ振興協会理事長
公益社団法人　日本サウナ・スパ協会　諮問委員
沖縄県エステティック・スパ協同組合　顧問
特定非営利活動法人
健康と温泉フォーラム理事
国立大学法人　琉球大学
非常勤講師

「健康と温泉フォーラム in 阿賀野市」が開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

健康と温泉フォーラムでは長きにわたって温泉の健康利用の促進や温泉地の諸問題について多くの関係者が集まり、研究し、意見交換をしてきました。この「健康と温泉フォーラム in 阿賀野市」ももちろんですが、80 回以上になる月例研究会を通して様々な課題について方向性を示し、解決への道のりを示してきました。日本生産性本部が毎年発刊する「レジャー白書」では、2017 年も余暇活動における参加人口のトップは７年連続国内観光旅行で 5,240 万人でした。もちろんその中で温泉旅行は多くを占めていると思われます。また。11 位が温浴施設（健康ランド、クアハウス、スーパー銭湯等）で 2,750 万人となっています。多くの人々が温泉旅行や旅行に行けないときは温浴施設を利用し、入浴を楽しんでいます。しかしながら、温泉の効能や、効果的な入浴方法、正しく美しい入浴のあり方などは、温泉文化を自負する日本人でも知られていないことが多いように思います。そういったことからも、健康と温泉フォーラムが活動を続けることで、日本の温泉、温泉文化のさらなる発展と世界への発信ができるものと考えています。

今年５月には大分県別府市において「世界温泉地サミット」が開催されました。また、環境省では「新・湯治」プランが推進されています。国内においても世界においても温泉が見直されています。海外のスパ関係者から日本の温泉施設の視察の相談を受けることも増えています。日本スパ振興協会でも「チーム新・湯治」に参加し、海外のスパ協会に対して日本の温泉の素晴らしさや入浴について情報を発信しています。日本国内への啓発はもとよりですが、今後は温泉に訪れる外国の方々へ日本の温泉の歴史や文化やマナーの発信についても考えなければならない時だと思います。来年はラグビーのワールドカップ、２０２０年には東京オリンピック、パラリンピックが開催されます。文化的背景の異なる海外からのお客様への対応など、気持ちよく日本ならではの温泉を楽しんでもらえる方法を考えていくことも必要と思います。健康と温泉フォーラムに集う皆様方と協力して、温泉の正しい発展、温泉を通して地域の活性と人々の健康が実現できることを期待しています。

後援者挨拶

野中 ともよ

のなか　ともよ

特定非営利活動法人
ガイア・イニシアティブ代表

「アマゾン」と聞いて、あなたは何を思い浮かべるだろう？ 92歳になる私の母に尋ねたら「ああ、あの、南米の大きーな河でしょ?」と答えるだろう。還暦越えの世代に聞けば「ああ、あの本屋さん。当時は洋書買うのに、ホント助かったよね」。で、娘の世代はそれを聞いてびっくりしながら「えっ本屋さんだったの…?」。

そう、若い世代は、もう、シャンプーひとつ、歯磨きなくなったーの日用品も「アマゾン」。翌日指定されたほぼほぼの時間に、手元に届けてくれる便利な百貨店であり、専門店であり、御用聞きにもなっている。家具も、車だって買える。その本屋で始まった会社の時価総額が先日一兆ドルを超えた、と話題になった。我が日本の、時価総額ナンバーワンを誇るToyotaが、22兆円。天下のトヨタの5倍以上の規模である。象徴的な物作り天下にも転換期が来ているのである。

ローマ時代の年長者の日記にも「昨今の若いモノ達にはホトほと困ったものだ....」とあったという。社会的変化と、世代間の違和感は、地球の常、なのだろう。だけれど、過去を振り返るとき、節目ふしめのいくつかが教えてくれることがある。技術の革新が起きた時、そのbefor & afterは、ほとんど全ての価値観や、秩序や　規則においてシフトが起き「過去」は葬り去られていく、という事実である。アマゾン然り、携帯電話然り、AI然り。インターネットという新しい情報通信技術の登場が、問屋さん、旅行代理店、印刷　屋さん…須らく顧客と業者の中間にいた職種の存在を木っ端微塵に していく。

さて、本題の当「健康と温泉フォーラム」である。

未来に向けて、何を棄て、何を新たに始めて行けば良いのかを見極めるヒントに、今回の集いがなることを心から願っている。

まず、『温泉』と聞いて、社会は何を思い浮かべてきたのだろうか?

そう。大方の人々は、お年寄りの湯治よりも、団塊世代の御用達イメージだろう。経営するサイドも、お客サイドも、とにかく昭和の高度経済成長の時代のニーズとばかりに、大宴会場付きの、大浴場の、尾頭付きの品数満載、浴衣にスリッパペタペタ……。つまりは、企業や組織の括りがお客さんの主体であれば良かった時代。でも、右肩が上がっていけた時代が終わり、下がり、やや持ち直し、なだらかながら、下がりそうだけれど、一方で、上がりっ放しでひどく羽振り良い連中も登場し....。つまりは、「景気」という名の「お金のメモリ」に激しく翻弄されながら、戦後「温泉街」が対応し続けてきた姿が、大半の消費者が思い浮かべる「温泉」イメージ だったと思う。その激流の中での廃業、新規参入、異業種とのM&Aなどなど、もちろん様々な努力もあったけれど、これをもっとドラスティックにシフトするべきタイミングではないのか?という視座。

また、『健康』と聞いての反応も、然り。戦後は、食べていけること、ズバリそれを意味したが、続いて、グルメ的食事事情が登場し、美味いものの幸せが、高度経済上昇カーブとシンクロして、高血糖、高血圧、高コレステロール、肥満、の　全国拡大へ。先進国押し並べてこの流れに加えて、癌という名の大敵が「疾病」のトップリスト入り。加えて「ストレス」という名の 同じく、わかったようで各人各様それぞれに異なる「厄介モノ」も、のさばり始め、病気でないことが、則「健康」である、とも言えなくなってきたのがこんにち的状況である。

時あたかも、癌の免疫治療アプローチがノーベル賞！というニュースが飛び込んできた。日本医学界では、マユツバもんというレッテルすら貼られたことがある「免疫療法」である。関係各位の胸中いかばかりだろう、と門外漢の私ですら飛び上がるほど嬉しくなった。外科手術や放射線治療は、対処療法で迫る。それに対して、免疫力というのは、私たちが、本来備え持っている生きるチカラそのもの。つまり「いのち」の力に立脚した視座であり、これは、病 に対峙する根本的な捉え方の違いであることがわかる。

思えば、その昔の弘法大師の観察眼よろしく、温泉こそが「免疫力」の母と呼びたいくらいの存在であったことは、周知のこと。

日本列島各地で、太古の昔から人々は、山奥の湯煙の中に伏し目で浸かるお猿さんや、傷ついた鹿さんたちの姿を見つけていた。そっと、足を浸けてみた。身も心もしっとりと解けていくこの解放、快感、それは至福に繋がり、気が付けば、身も心もエネルギーに満ちている自分がそこにいた…。そんな発見と、伝承が「湯治場」として、文化とも言える食や芸能やローカルそのものを、日本各地で固 有のカタチにしてきたのである。なんということ。ノーベル賞も真っ青くらいのミッションを果たして来てくれたことが、よく分かる。

50億年以上も昔に生まれた、この地球という星のど真ん中のマグマが、あっちっちのまま吹き出れば、ハワイ島の火山だが、「温泉」は、各地の全く異なる地層や水層のバームクーヘンの妙を突き、侵入しながら、ほっこりと、そこに顔を出して私たちに届けてくれている、マザーアースからの、その地その地でしか創れないカクテルのようなもの。まさに、生きた贈り物である。それに、浸かれば、母のゆりかご。喜ぶのは、お財布ではなく、真っ裸の私たちの「いのち」なのだ。これこそ、万国共通。おひとりさまに、ひとつずつ。 どんな巨万の富びとにも、たった一つだけ。

の富びとにも、たった一つだけ。

世をあげてのOrganicブームも、ようやく「いのちのメモリ」の 重大さに気がつき始めたということ。「景気や経済」も大事だけれど、おっとっと、生きててなんぼ、元気でなければ人生ハナシにならないね！という、当たり前の事実に世界の人々が気付き始めたということだと思う。

混沌の時代、激変の時代…呼び方は様々あるが、平たくいえば、 何がどうなるか、手本や前例など、何ひとつない時代が流れているのである。こんな時代を生き抜くコツはただひとつ。「お金のメモリ」から「いのちのメモリ」へ価値の軸をシフト。志を持って、好きなことをする。正しいことをする。おごることなく楽しく過ごせる工夫をする。はたらく。働くというのは「傍ハタ」を「樂ラク」 にすること！小さい頃から耳タコものの祖母の言葉をシェアさせていただき、筆を置きたい。

記念講演

「三浦家の健康長寿の秘密」

三浦 豪太

みうら ごうた

プロスキーヤー、博士(医学)

当時日本人男性の平均寿命が 79.94 歳と言われていた中、人類の生存限界を超えた標高であるエベレスト山頂、そこに自分の足で登り 80 歳と 10 ヶ月という年齢で立った三浦雄一郎。その過程には加齢に加えて不整脈、骨盤骨折との戦いであった。

三浦敬三は 77 歳でキリマンジャロ登頂、88 歳オートルート制覇、99 歳バレーブランシュ大滑走といった人生の節目で新たな目標をたて実現して行きました。

今回の講演では私三浦豪太自身の五輪体験や近くで三浦敬三と三浦雄一郎の挑戦をサポートしながらどのようにこうした困難と立ち向かい、克服したのか、そしてその裏にある三浦家の健康長寿の秘密について話してみたいと思います。

日本温泉首長サミット会議

ファシリテーター

合田 純人

ごうだ　すみと

特定非営利活動法人
健康と温泉フォーラム
常任理事

観光地としては競合という立場であった温泉地が、連携し、共通の課題や、地域固有の情報の共有を図り、温泉利用の医療費控除の条件緩和や普及体制づくり、温泉の効能効果への実証実験成果の共有、温泉のグローバル化への対応など一連の連携事業には大きな進展もありましたが、また同時に、その社会的課題も見え、３０年の平成という時代が終わろうとしています。

ここ阿賀野市で全国の温泉地連携事業のモデルとして、2013（平成 25）年頃から本格化した「ラジウム・ラドン温泉広域連携事業」、温泉療法医が勧める「日本の名湯百選 © 連携事業」さらには環境省が 1954 年にスタートした国民保養温泉地制度など、日本の温泉地連携の真価が今試されようとしています。

クア（療養）からウエルネス（健康増進）そして、ポスト・ウエルネス（心の健康づくり）と進化しているグローバル・サーマリズムの潮流は、心や魂の再生の場として、自然と一体となる伝統的な「湯治」の概念に近く、いま日本の温泉文化が世界から注目されています。こうした、我が国の伝統的な生き方や智慧を私達日本人が忘れることなく、世界に誇れる心豊かな時代の幕開けとなることを願います。

1949 年生まれ香川県出身。1986 年設立の健康と温泉フォーラム創立メンバーで、世界保健機関（WHO）と公式関係を持つ国際温泉気候連合のアジア・太平洋協議会（FAPAC）事務局長を 1988 年から 2002 年まで兼務。永年、欧州温泉国との研究交流を継続しながら、域内のペルーやイラン政府などの温泉開発やその社会化に関わり、温泉のグローバル化を積極的に進めてきた。国内では、温泉地の広域連携や温泉研究の産官学のプラットフォームづくり、温泉療養の医療費控除など政策提言、
特に最近は、温泉人材の育成などに力を注いでいる。専門は健康社会学。

田中 清善

たなか　きよよし

新潟県 阿賀野市長

昭和２６年７月１９日生
昭和５５年３月早稲田大学理工学部卒業
昭和５５年４月新潟県庁入庁
平成２３年３月新潟県庁退職
平成２４年４月２５日阿賀野市長就任

本日、「地域で活かす温泉－生命と心のサンクチュアリー温泉新時代へ」をテーマに、「健康と温泉フォーラム2018 in 阿賀野市」が、ここ新潟県五頭温泉郷で盛大に開催されますことをお祝い申し上げますとともに、全国各地からお越しいただきました皆さまに市民一同心から歓迎申し上げます。

１　阿賀野市の概要

本市は、新潟県の北東部、新潟平野のほぼ中央に位置し、県都新潟市に隣接しています。平成16年4月に4町村が合併し、市の西側を流れる大河「阿賀野川」を由来として阿賀野市として誕生しました。東に標高千メートルほどの県立自然公園「五頭連峰」を背に、田園風景と自然豊かな景観が広がっています。

江戸時代には、幕府直轄の天領として代官所が、明治2年には越後府として水原県が置かれ、越後における政治・経済・行政の中心となり、まさに新潟県政発祥の地でもあります。

五頭連峰は弘法大師が開山したと伝えられ、信仰の山であるとともに、多様な登山ルートがあり、毎年多くの登山者で賑わっています。また、山麓一帯は全国森林浴の森百選に指定され、自然散策や沢登り、ハイキング、キャンプなどのアウトドア施設も整備されています。

五頭連峰の麓には、開湯1200年を誇る新潟県最古の温泉地である出湯、今板、村杉の3つの温泉地からなる五頭温泉郷が静かな佇まいをみせ、多くの方から天然ラジウム温泉を楽しんでもらっています。

また、本市には日本で初めて白鳥の餌付けに成功した「瓢湖」があります。瓢湖は、ラムサール条約の登録湿地でもあり、毎年、10月になると５千羽余りの白鳥が飛来し全国有数の白鳥の湖として知られ、3月中旬まで市内の至る所で、シベリアからの冬の訪問者である白鳥を日常の風景として間近に観察することができます。

本市の基幹産業は、稲作を中心とした農業となっています。阿賀野川や五頭連峰から流れ出る豊富な水と肥沃な大地で生産されるコシヒカリをはじめ、野菜や山菜、果物、牛乳など安全で安心な農産物を生産しています。また、新潟県酪農発祥の地でもあり、新鮮な生乳から製造されるヤスダヨーグルトは全国ブランドになっています。

近年、若手農業者の確保育成や園芸に興味を持つ者の研修の場として温度や肥料管理を自動化させた情報通信技術（ICT）園芸ハウスを整備し、トマトを栽培しており、収穫されたトマトは直売所などでの販売ほか学校給食での利用や五頭温泉郷の旅館で新たなメニューを開発し提供されています。

２　温泉をはじめとする地域資源の活用

（WALK ＆ EAT五頭温泉郷 ～秘密の散歩道～）

本市では、地域資源を活用した取り組みの一つとして、国民保養温泉地の散策と地元グルメ（地産地消の食材）、景観、温泉を組み合わせ体感できるウォーキングイベント「WALK＆EAT五頭温泉郷～秘密の散歩道～」を開催し好評を得ています。これは、五頭温泉郷の若旦那や若女将たちが企画したもので、地元の人しか知らないような秘密の散歩道（遊歩道）などの散策と３つの温泉地の名所などをめぐり、各ポイントで地域の美味しいご飯や旬の食材を使った一品料理、スイーツなどの食のおもてなしと地域の方々との会話など交流を楽しみ、温泉とともに五頭山麓の魅力を身近に堪能していただけるイベントです。参加者が温泉入浴に加えて、自分たちのペースでゆったりと大自然に触れながら、併せて地域の食を堪能する。まさに「新・湯治」といった取り組みが行われています。

今後、これが一つのイベントだけにとどまらずいつでも継続的に体感できる体制づくりが必要であると考えています。

３　市立笹岡小学校４年生総合学習

笹岡小学校は、五頭温泉郷のある阿賀野市笹神地区（旧笹神村）にある全校児童数178名の小学校です。この小学校では、４年生が五頭温泉郷の歴史、特徴を調べるとともに、温泉を守り自然の恵みを生かしている人々の苦労や生きがい、温泉への思いなどを知り、五頭温泉郷の良さを多くの人々に伝えようと総合学習に取り組んでいます。子ども達は、実際に温泉地に出向き、基本調査と旅館見学など地域の方との交流を通じそこで学び感じたことを発表されています。

子ども達からは、自分たちの自慢できる温泉であり地域の宝ものでもあるとの思いが強く感じられ、私たちもそうした思いをしっかりと受け止め、支えていきたいと改めて感じたところです。

また、子ども達には、これからも引き続きこの地域を愛し、五頭温泉郷の良さを多くの人に伝えてほしいと願っています。

４　終わりに

市民の健康づくりには、温泉を欠くことができないものと考えております。

この度、本フォーラムにおいて、温泉を活用した健康づくりやひとづくり、まちづくりの必要性を再確認するとともに、今後さらに、この温泉という地域資源を活かす取り組みを関係者及び地域と一体となって進めてまいりたいと考えております。

結びに、フォーラムの開催に多大な御尽力を賜りましたNPO法人健康と温泉フォーラム並びに関係各位のご努力に敬意を申し上げ、御挨拶といたします。

石田 耕太郎

いしだ　こうたろう

鳥取県　倉吉市長

昭和 48年３月 大阪市立大学法学部卒業
昭和 54年 10 月 鳥取県職員
平成 12年８月 境港管理組合事務局長
平成 14年４月 福祉保健部長
平成 18年４月 生活環境部長
平成 21年４月 県営病院事業管理者
平成 22年４月 倉吉市長

「地域で活かす温泉－生命と心のサンクチュアリー温泉新時代へ」をテーマに、「健康と温泉フォーラム 2018 in 阿賀野市」が新潟県阿賀野市で開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

また、昨年 10 月に当市において開催させていただきました際には、遠路、多くの方に足を運んでいただき、ご参加ご協力いただきましたこと、改めてお礼申し上げます。

１　倉吉市の概要

倉吉市は、鳥取県中部に位置する人口約５万人の市です。“倉吉”の地名の由来は“暮らし良し”とも言われており、恵まれた自然環境と豊富な農産物を有し、人柄は穏やかで、長年培われた歴史・文化・芸術が今でも人々の生活に息づく山陰の中核都市です。

市内には国の重要伝統的建造物群保存地区として選定されている打吹玉川地区を中心に、江戸時代末期から昭和初期までに建てられた家屋や土蔵が多く残り、その街並みは、往時の面影を残す懐かしい佇まいをみせています。

市の南部、中国地方の名峰大山の東山麓に位置する関金温泉は、養老年間（717年～ 724 年）に鶴が怪我を癒すために入浴しているところを行基が発見し、弘法大使が再興したと伝えられています。700年代後半に伯耆国の国庁が倉吉市におかれたことから、湯治場として、また、山陰と山陽をつなぐ備中街道の要所にあることから宿場町として栄えてきました。お湯の見た目は無色透明で、その美しさから「白金（しろがね）の湯」とも呼ばれています。泉質は神経痛やリウマチなどによいとされる単純弱放射能泉で、湯治客や地元の方など多くの方に親しまれています。自然環境に恵まれ、泉質の療養的な効果が高いことから、国民保養温泉地（昭和 45 年）と日本の名湯百選（平成 23 年）に選ばれています。

２　関金地区の取り組み

山陰屈指の古湯である関金温泉は、平成 29 年度に開湯 1300 年を迎え、関金の原点である源泉（＝温泉）に立ち返り、皆で未来の関金像を考えていこうという思いのもと、源泉回帰「関金温泉開湯1300 年祭」を開催しました。この中で、関金地区に脈々と受け継がれてきた温泉、歴史、伝統文化、豊かな自然などの地域資源を再認識することからはじめ、観光、健康、文化、地域などの様々な視点からこれを磨き上げ、組み合わせることで、「関金ならでは」を感じることができる体験を作り上げてきました。

また、平成 30 年度は、鳥取県西部に位置する名峰 大山が開山 1300 年を迎えたことから、関金地区で取り組んだ事業を大山の歴史と結び付けながら、民間団体が主体となって取り組み、さらなる磨き上げやＰＲを行っているところです。

この中で、関金温泉を中心として、大山の東山麓に広がる地域資源の魅力を発信し、東大山山麓の地域ブランディングを目的とした「東大山古道トレッキング」では、関金温泉と旧国鉄倉吉線廃線跡を結ぶトレッキングコースが、温泉と健康を意識したメニューとして定着するとともに、関金温泉街を中心としたウォーキング文化が広がっていくことを期待するものです。

また、かつて関金地区で盛んであった「たたら文化」を気軽に体験してもらう「ミニたたらワークショップ」では、関金地区の文化に触れてもらう新たな体験メニューとして、将来的な観光商品化も視野に入れています。

３　関金温泉国民保養温泉地計画の推進

平成 24 年に国民保養温泉地の指定に係る基準が見直されたことを踏まえ、平成 30 年７月に新たな関金温泉国民保養温泉地計画の承認を受けたところです。

今年度は、関金温泉国民保養温泉地計画の推進にあたり、温泉街を一望できる亀井公園の環境整備を行い、ウォーキング環境や温泉街周辺の景観整備を実施しています。また、温泉街を中心に周辺エリアも含めたウォーキングマップや看板の整備を行い、誰もが自由にウォーキングを楽しめる環境づくりを予定しています。

さらに、関金温泉を訪れた人々が温泉をはじめ自然、文化、交流、健康づくりなどを楽しみながらゆっくりと滞在し、心身ともに健康となれる新たな地域活性化のコーディネーターとして「地域おこし協力隊」の募集を行っているところです。

本計画を今後の関金温泉の温泉地づくりの方向性として、関金温泉旅館組合や地域団体とも連携を図り、自然、食、文化など地域資源を楽しみながら中期的に保養・休養できる健康増進の場として、市民と湯治客が往来する賑わいある温泉地をめざしてまいります。

４　おわりに

本フォーラムにおける事例発表や意見交換を通じて、温泉が観光分野のみならず健康分野の利活用や温泉を中心とした地域活性化など、各温泉地の取り組みに広がっていくことを期待しております。

結びになりましたが、本サミットの開催にあたり、ご尽力賜りましたＮＰＯ法人健康と温泉フォーラムをはじめ、開催実行委員会、関係者各位に敬意を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

渡辺 英子

わたなべ　えいこ

山梨県　北杜市長

昭和42年 日本体育女子短期大学卒業
昭和42年 山梨県教職員
平成15年 長坂町議会議員
平成16年 北杜市議会議員
平成24年 北杜市議会議員

「地域で活かす温泉一生命と心のサンクチュアリー、温泉新時代へ」をテーマに「健康と温泉フォーラム 2018 in 阿賀野市」が開湯１２００年の歴史ある五頭温泉郷にて開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

1. 北杜市概要

北杜市は、山梨県の北西部に位置し、北は八ヶ岳連峰、東は瑞牆山、金峰山、茅ヶ岳、西は甲斐駒ヶ岳を代表する南アルプスと周囲を山々に囲まれています。秩父多摩甲斐国立公園、南アルプス国立公園、八ヶ岳中信高原国定公園、県立南アルプス巨摩自然公園を有し、特に南アルプス地域は、ユネスコエコパークに登録されるなど、全国有数の美しい自然環境に恵まれた地域です。

また、山岳景観に加え国蝶オオムラサキの生息数、ミネラルウォーター生産量、日照時間が日本一を誇るまさに「山・紫・水・明」の地です。このような豊かな自然が、都心から約 2 時間という至近な距離で楽しめることから、年間約４００万の観光客が訪れます。

北杜市の自然環境は、農業に最適な地としても注目を集めています。「安心・安全・日本の台所」として、日照時間、清らかな水、澄んだ空気などの豊かな自然を活かし、日本穀物検定協会の食味ランキングにて通算１０回の特Ａ評価をいだいてる梨北米をはじめ、牛乳・チーズといった乳製品、レタスなどの高原野菜、そばや大根などのおいしい農畜産物を生み出しています。また、首都圏までのアクセスも良いことから、これまで企業型農業生産法人２４社が参入しています。

北杜市は高齢化率が３６パーセントと高いですが、介護保険料基準月額は県内で最も低いことから、日常的に頂くことができる農産物、心に癒しをくれる自然景観、これらすべてが「健康」に始まり「幸せ」につながるもの（健幸北杜）と考えております。

2. ふるさと創生にむけて

こうした中、宝島社の月刊誌「田舎暮らしの本（２月号）」の「２０１８年度版住みたい田舎ベストランキング」にて、人口１０万人未満の「小さなまちランキング」総合部門１位に北杜市が選ばれました。この機をとらえ、「住んでよし」「訪れてよし」「働いてよし」を実現し、北杜市の魅力を高め定住人口の増加を図るなど、地方創生を強化しているところであります。

取り組みのひとつに「世界に誇る「水の山」プロジェクト」があります。北杜市は全国でも唯一、名水百選が３ヶ所あります。この清らかな水資源が、人々を心身ともに健康にするといった価値と魅力を国内外に広めながら、地域そのもののブランド化と活性化を、地元企業、市民とともに図っています。

また、恵まれた自然環境に ‘働きやすさ’ を加えることで、さらに北杜市の魅力を高めることができると考えています。市内には、世界に誇れる技術を持った製造企業や、飲料・食品メーカーも多く、最近では、企業型農業生産法人の進出が増えており、“ 世界に誇れる企業 ” と “ 働く人 ” を支援するため、『北杜市雇用創造協議会』を設立し、若者や女性だけでなく、シニア世代まで、多様な人材が活躍できるまちづくりを推進しています。

そのほか、長野県と山梨県が連携し、八ヶ岳南麓を中心とした「星降る中部高地の縄文世界」が、５月に文化庁から日本遺産の認定を受けました。北杜市の梅之木遺跡などが構成要素に含まれており、構成市町村と連携を図りながら地域の歴史的魅力を観光資源にする事業により、訪日外国人の集客も進めて参りたいと考えています。

3. 増富地域での取り組みについて

増富ラジウム温泉峡は、秩父多摩甲斐国立公園の瑞牆山と金峰山の麓にあって、信玄公の隠し湯として約４５０年の歴史を誇り、全国有数のラジウム含有量を持つことから古くから湯治客に親しまれてきました。また、平成の名水百にも選ばれた「金峰山・瑞牆山源流」の本谷川を代表とする渓谷美や、大小様々な岩が切り立つ瑞牆山の独特な景観、さらには今尚残る昔ながらの里山風景が、訪れた方の心を癒してくれます。今年７月には、新たな基準による国民温泉保養地計画が承認され、本計画の推進に向けた、自然療法、食事療法、運動療法と組み合わせた総合的な療養ができる新しい温泉地づくりを進めています。

また、市では、南アルプスユネスコエコパークに続き、秩父多摩甲斐国立公園を中心とした地域のユネスコエコパークの登録を目指しており、今年３月には、ユネスコの国内委員会の推薦が決定しました。県や関係市町村と連携を図り、登録に向けた啓発活動、トイレの改修工事や案内看板の充実など、自然に配慮した環境整備を行っているところであります。増富地域は、北杜市内でも特に高齢化率が高いエリアでありますが、脈々と受け継がれてきた文化、風習、知恵が根付いている地域でもあります。鹿肉や花豆、大根などの地のものを活用した特産品づくり、県内外の大学と連携した田舎体験プログラムの開発など、自然環境の保全と調和した持続可能な地域社会のモデルとなるべく、取り組みが進められています。

4. 終わりに

北杜市には増富温泉を含め１０箇所以上を超える温泉があり、市民や観光客に癒しを与えてくれる重要な存在です。本フォーラムは幅広い知見が集まることから、温泉が有する魅力や誘客力を高め、ふるさと創生につながるものと期待しております。

結びに、健康と温泉フォーラム 2018in 阿賀野市の開催にあたって、多大なご尽力を賜りましたＮＰＯ法人健康と温泉フォーラム、阿賀野市の関係各位に感謝申し上げるとともに、みなさまのふるさとの発展を祈念しましてご挨拶といたします。

江頭 実

えがしら　みのる

熊本県　菊池市長

昭和 47 年 菊池高校卒業
昭和 51 年 九州大学経済学部卒業
昭和 51 年 富士銀行（現みずほ銀行）入社
ドイツ・ニューヨーク・ロンドン・スイス
など主に海外部門に従事
スイス富士銀行社長・ロンドン支店長を歴任
平成 21 年 ソフトバンクに入社
平成 25 年 菊池市長に当選

「地域で活かす温泉―生命と心のサンクチュアリー、温泉新時代へ」をテーマに、「健康と温泉フォーラム2018ｉｎ阿賀野市」が新潟県阿賀野市で開催されますことを、心よりお祝い申し上げます。

菊池市は、熊本県北東部に位置し、阿蘇外輪山を源流とする菊池川が肥沃な大地を作り出し、米や野菜、畜産など多彩な農林畜産物が育まれています。

今から約700年前の南北朝時代、市名に名を残す豪族「菊池一族」が九州で大いに活躍し、繁栄したのはこの恵まれた自然があったからだと言われています。

また、「渓谷美の極致」とも称される菊池渓谷は、春の瑞々しい新緑、夏の木陰と清流、秋の渓流に映える紅葉、冬の雪景色など、四季を通して様々な美しさを見せ、人々の心を和ませています。

菊池温泉は、昭和29年に町なかで湧出し、平成23年10月に「日本の名湯１００選」の認定を受けました。４５℃の温度を保った天然の温泉は、無味・無臭・無色透明のアルカリ性で、肌に優しく柔らかい泉質は美容・神経痛・リウマチなどに効能があると言われています。別名「美肌の湯」「化粧の湯」と呼ばれるほど肌ざわりがよく、女性をはじめ多くの観光客に親しまれています。現在、約１０軒の宿があり、それぞれの宿で泉源を持つほど湯量が豊富であることも自慢です。

菊池温泉の湧出は、掘削を主導された当時の商工会長が夢の中で見たという「白龍」が起源と言われています。この「白龍」伝説を基に、毎年８月に開催される「きくち夏まつり」では長さ50m、重さ400kgにもなる巨大な２体の白龍が商店街を練り歩き、勢いよく演舞する姿は圧巻の一言です。平成28年１月に東京・浅草（まるごとにっぽん）で演舞を披露したことをきっかけに、同年８月には横浜（日産スタジアム）で開催された「ももいろクローバーＺ」コンサート、平成29年１月には東京（東京ドーム）で開催された「ふるさとまつり東京」で演舞を披露し、その迫力ある姿で多くのお客様を魅了しました。

本市では、平成13年度より温水プールや温泉を活用した健康づくり事業の推進を図っており、健康づくりの支援体制の整備と併せてグループや団体の組織をつくり、自助による市民主体の活動へと移行してきました。

更に、温泉を活かした「予防医学」と「長期滞在型観光」の振興も視野に、平成27年度より、保健指導機関と観光産業、行政が連携して健康づくりを支援する『スマート・ライフ・ステイ』事業に取り組んでいます。菊池渓谷に代表される雄大な自然に触れるアクティビティ、地域の食材を活用した健康メニュー、肌に優しい「菊池温泉」で過ごす癒しの時間など菊池観光の魅力を満喫しながら、菊池養生園保健組合（広域保健センター）で医師・保健師らによるメディカルチェック（特定健診）や保健指導、運動・生活に関するグループワークで自身の健康を見つめ直していただく、充実したプログラム内容となっています。アクティビティには、陸上に比べて体にかかる負担が少なく、血行促進などの効果も期待できるとして、温泉を活用した湯中運動も取り入れています。また、ここでのプログラムが終わった後も、保健師・管理栄養士らによるサポート体制を整えています。参加者の検査データからは改善効果が見られ、「自分の健康づくりを見つめ直す良い機会になった」と行動変容に繋がる声もいただいています。今年度は、福岡県市町村職員共済組合がこの『スマート・ライフ・ステイ』事業への参加を特定健診受検とみなして参加費を助成いただいている他、八代市でも住民へ向けた本事業の周知にご協力いただいております。

また、観光客だけでなく、地域の方々にも「菊池温泉」をより身近に感じ、親しんでもらいたいという願いから、地元保育園・幼稚園児や小学生を対象に、公衆浴場でのマナーや入り方、菊池温泉の湧出の歴史などを学ぶ温泉教育にも取り組んでいます。

私は、菊池に何度も行きたくなる、住みたくなる『癒しの里菊池』の実現を目指しており、そのための重要なキーワードは「健康」だと考えています。今、人々は心や身体の充足＝健康を求めています。健康で豊かに過ごしたい、だから菊池に行きたいと選んでもらえるようなまちにしたいのです。ここ菊池には、先人たちが長く守り続けてきた「宝」があります。豊かな土地が育む食。悠久の時間が織り成す歴史や文化。そして、心や身体をほっと癒してくれる温泉。何物にも代えがたい菊池の「宝」であり、その全てが人々の心や身体の充足＝健康づくりに繋がります。この「宝」を求めて多くの人々が菊池に集い、交流が生まれ、さらに魅力あるまちへと発展していくことが『癒しの里菊池』の実現であると考えています。そのために、一つ一つのコンテンツを磨き上げ、繋げ、丁寧に商品化し、発信していくことが重要であると考えています。

結びに、本フォーラムの開催にあたり、多大なご尽力を賜りましたＮＰＯ法人健康と温泉フォーラム、新潟県阿賀野市並びに関係各位に心からの敬意を表しまして、ご挨拶とさせていただきます。

首藤 勝次

しゅとう　かつじ

大分県　竹田市長

1953年生まれ
大分県竹田市出身。
1972年同志社大学入学。
1976年からの直入町役場職員時代に炭酸泉を縁としたドイツとの国際交流を推進し、姉妹都市締結を実現。
温泉療養文化館「御前湯」の初代館長を務めた後、退職。
大分県議会議員3期を経て
2009年4月より現職となり、
数々の先進的な政策を展開。
2004年国土交通省「観光カリスマ」認定
2015年温泉功労者環境大臣賞2016年マニュフェスト大賞優秀賞受賞。

「地域で活かす温泉 - 生命と心のサンクチュアリ -、温泉新時代へ」をテーマに新潟県阿賀野市で「健康と温泉フォーラム 2018 in 阿賀野市」が盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。

1．竹田市の概要

大分県の西部に位置し、熊本県、宮崎県に隣接する本市は、岡藩七万石の歴史文化薫る城下町や、瀧廉太郎作曲「荒城の月」のモチーフとなった国指定史跡「岡城跡」、日本百名山「久住山」を主峰に峰々が連なるくじゅう連山・久住高原、その大自然によって育まれる農産物や名水名湯豊かな都市です。

その中でも国内屈指の高濃度炭酸泉として有名な「長湯温泉」は、温泉街の真ん中を流れる芹川の流域に五十一の泉源を有し、毎分およそ 4,100 リッターの国内でも珍しい炭酸泉が湧出しています

2．竹田市の取り組み

私が 2009 年（平成 21 年）に竹田市長に就任してすぐ、「個性的な温泉地づくり」の新たな戦略としてヨーロッパのように温泉療養に保健を適用させる制度を提案し、システムの実証実験を経て、同年導入致しました。これまで日本になかった先進的な施策で、原資は目的税である入湯税の一部を活用しております。

この制度は、竹田市観光ツーリズム協会及び各地域の観光案内所でパスポートの申請を行い、システムに協賛をしている宿泊施設や日帰り温泉施設で利用後スタンプを押してもらい、竹田市観光ツーリズム協会へ給付申請を行います。申請後、書類の確認作業ののち、給付金が振り込まれるという仕組みです。

制度の導入に伴い、システムを利用する滞在者が増え始め、宿泊平均では 5.3 泊（平成 27 年度）の長期滞在の実績が生まれ、滞在者の来訪時期の分散化も図られています。また、大阪観光大学観光学部の地域経済影響調査結果によると投資額に対して 20 倍、3,461 万円の波及効果があったことも報告され、消費額の向上、雇用の安定などさまざまな効果を生み出しております。

このような取り組みが評価され、2016 年（平成 28 年）2 月には、日本ヘルスツーリズム振興機構主催の「第 8 回ヘルスツーリズム大賞」を受賞致しました。

また、世界に冠たる「温泉資源」を活用した「予防医療・健康づくり」と新たな観光振興をテーマに、地方創生交付金事業に取り組み、慶応義塾大学との連携による「飲泉の医科学的なエビデンス調査」や本市独自の「竹田市総合インストラクターの育成」といった取り組みも進めて参りました。

このような人材を活かして、昨年 7 月 27 日には、長湯温泉療養文化館「御前湯」とＢ＆Ｇ直入海洋センター体育館が、温泉力協力協定を締結している北海道豊富町の施設とともに「温泉利用型健康増進施設（連携型）」として平成 29 年度（第 1 期）の認定を厚生労働大臣より受けました。これは一体型を含め、九州では唯一の認定施設であります。

最近では、本年度より申請が開始されました「ヘルスツーリズム認証」制度の第 1 期として、本市観光ツーリズム協会の健康増進プログラムが 10 月 2 日に認証されました。

現在、我が国は、急速な少子高齢化による社会保障費や医療費の増大といった課題に直面しています。これらの解決に向け、世界有数の温泉大国日本に存在する 3,100 ヵ所の温泉地が連携し、新たな潮流を作ることが必要であり、これこそが私たち温泉地の使命であります。

本フォーラムにおいて、闊達な議論を重ね、先導的な施策や英知の交流を図り、温泉資源の更なる有効活用に拍車がかかるよう期待しております。

結びに、開催にあたり、多大なご尽力を賜りました NPO 法人健康と温泉フォーラム、新潟県阿賀野市をはじめ多くの関係各位のご努力に深く敬意を申し上げ、ごあいさつとさせて頂きます。

工藤 栄光

くどう　えいみつ

北海道　豊富町長

昭和24年　豊富町生まれ
陸上自衛隊２特連スキー競技特別戦技訓練隊パイアスロン隊員を経て
昭和47年豊富町役場入り
平成11年助役就任
平成15年町長
現在4期目

1　温泉利用型健康増進施設の認可

豊富町は、北海道最北端の稚内市より南に約４０km 南下した場所に位置し、泉質に含まれている石油成分が皮膚疾患に効能があるといわれている豊富温泉を始め、豊かな自然環境を有する町です。

豊富温泉町営ふれあいセンターは、かねてより切望しておりました温泉利用型健康増進施設（連携型）の認可を、昨年７月４日に受け、８月１日より受入を開始しました。受入件数は、平成３０年3月３１日時点（平成２９年度分）で１３１件、平成３０年７月３１日時点（受入開始より１年）で１８１件となっております（【受入件数】平成２９年8月２５件、9月２２件、１０月１０件、１１月７件、１２月１０件、平成３０年1月１６件、2月１７件、3月２４件、4月１０件、5月１１件、6月９件、7月２０件 【男女比】男性６７人（３６%）、女性１１４人（７３%）【年齢構成】１０歳以下１９人（１０%）、１０代１２人（７%）、２０代４０人（２２%）、３０代３０人（１７%）、４０代４８人（２７%）、５０代２３人（１３%）、６０代３人（２%）、７０歳以上６人（３%））。この実績は、全国２０ある施設の平成２８年度の受入件数８９件を大きく上回る数字であり、このように多くの皆様にご利用していただけましたのは、以前より多数の湯治客が全国からご来場いただいていたことや、東京都や広島県など北海道外にも豊富温泉にご理解のある医師がおり、多くの「指示書」を書いて豊富温泉へ送り出してくださったおかげであります。現在も、平均して１ヶ月約１０名から１５名を受け入れており、昨年受け入れた１８１人の内、約３０%が本認可により制度を利用するため初めて豊富温泉に湯治に来られた方であり、認可による効果も大きいと感じています。

2　アトピーフォーラム

「雪が降りしきる中、ぼろぼろの体を引きずって、私はたった一人で日本の端っこの方までやってきました」

先日、当町で開催されました「アトピーフォーラム in 豊富２０１８」において、現在豊富温泉で湯治療養をされている女性が発表してくださった体験談の中でおっしゃっていた言葉です。数年前に脱ステロイドをご決心され、そのリバウンド症状に悩まされる中で豊富温泉のことを知り、遠方より単身で当町へ来られました。

豊富温泉へ湯治療養で来られる方の中には、従来の治療法が体質に合わず、藁にもすがる思いでやって来られる方が多くいらっしゃいます。アトピーが重傷化すると、皮膚が剥がれ肉がむき出しになることから日常動作でさえ難しく、窓から入った風が肌に当たっただけでも刺激となって痒みがおさまらなくなることもあり、そのような中で、薬という頼みの綱を失い「何をやっても無理」と、身体と心の両方を疲弊し、苦慮されておられます。

豊富温泉における湯治療養で大事にしていることの一つに「心の湯治」という要素があります。豊富温泉の泉質は皮膚疾患に効能があるとされておりますが、泉質以外の効能として、入浴時間という同じ時間を共有することで自然と語り合いの場が生まれ、他者の意見を聴くことで、自身の症状とどのように向き合えばいいのか見つめ直すことが出来るという特色があります。アトピーフォーラムにおいて「温泉に来て、同じ症状の方と話をすることで気持ちが楽になった」という体験談を話している方がいらっしゃいました。症状の改善だけではなく、湯治療養中に知り合った方とのつながりにより、心の療養も行なえることが豊富温泉の誇る最大の特色となっております。

3　活動の広がり

このような状況の中で、町としては昨年度より同フォーラムの重要性を鑑み、町の共催事業として開催し、町職員も事前準備の段階から参加することにより、支援体制の充実を図りました。共催２年目となる本年は、町職員である保健師が登壇し、基調講演発表者や湯治体験談発表者と座談会を通じお互いの意見を交換しました。

4　終わりに

「温泉は地球から恵まれた奇跡の水」という言葉を最近よく使わせていただいておりますが、前述した女性が体験談の中で「今ある日常は、幸せのかたまりで出来ている」とおしゃっていました。一度は死ぬことまで考えていた方が、豊富温泉に来て再び生きる希望を取り戻していることは、まさしく奇跡であると実感しております。

近年、豊富温泉は多くの関係者の方たちのお力添えによって、少しずつ全国の皆様に知っていただけるようになりました。増加する湯治客に対し温泉の抱える課題は未だ多く、繁忙期における浴槽の狭隘化対策、二次交通の整備、移住希望者の住居や雇用の確保等、様々な課題に葛藤する毎日でございますが、奇跡の湯である豊富温泉が、全国のアトピーや尋常性乾癬でご苦労されている多くの皆様方の財産としてご利用いただくことを念じながら日々精進を続けたいと考えております。

最後になりましたが、本サミットの開催にあたり、多大なご尽力を賜りました NPO 健康と温泉フォーラムを始め、阿賀野市関係者各位に感謝と敬意を申し上げるとともに、今後の発展を祈念しましてご挨拶とさせていただきます。

松浦 弘幸

まつうら　ひろゆき

鳥取県　三朝町長

昭和 32 年生まれ。
昭和 51 年に三朝町役場入庁、企画や観光分野を担当し、「現代湯治」を提唱。
企画観光課長などを経て、
平成 25 年に退職。
平成 26 年から民間企業で旅館経営や 6 次産業などに携わる。
平成 29 年 11 月 15 日三朝町長就任。

「地域で活かす温泉ー生命と心のサンクチュアリー、温泉新時代へ」をテーマに、「健康と温泉フォーラム 2018 in 阿賀野市」が、新潟県阿賀野市で開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

1　三朝町の概要

三朝町は、鳥取県のほぼ中央に位置し、町総面積の約 90%を山林が占める自然環境に恵まれた湯と山の町です。町の主な産業は、「観光」と「農林業」で、観光業では、世界屈指のラジウム含有量を誇る「三朝温泉」や国宝投入堂を有する「三徳山」などの観光資源を有しています。

およそ 850 年前に白い狼の導きによって発見されたと伝えられる三朝温泉は、大正 5 年に世界屈指のラジウム泉と認定され、以来、特徴的ともいえる泉質を生かした温泉療法に関する研究が岡山大学等を中心に進められ、三朝温泉は日本有数の湯治場として、訪れていただく皆様の心と身体を癒し続けて参りました。

農林業においては、「三朝米」や「神倉大豆」など、本町の自然環境をいかした農産物に注目が集まっています。

2　三徳山と三朝温泉

平成 27 年に、「三徳山と三朝温泉」が日本遺産に認定されました。

三朝温泉の上流に位置し、三朝温泉が発見されるよりずっと昔の、今から 1,300 年以上前に役行者が修験道の行場として開いたのが始まりとされる「三徳山」は、山岳仏教の霊場として栄えてきました。　険しい地形と特異の構造を持つ建築とが織りなす独特な景観を有しており、その厳かさは今も守り続けられています。

一方、開湯以来、三徳山信仰と深いつながりを持つ「三朝温泉」は、その昔修験者が三徳山参拝の前後に心身を清め癒すための大切な拠点であったとも言われ、今でも多くの参拝客が身を清め、疲れを癒しに訪れる地でもあります。

三徳山と三朝温泉との古くからのつながりは、断崖絶壁での参拝により六根（目、耳、鼻、舌、身、意）を清め、三朝温泉での湯治で六感（観、聴、香、味、触、心）を癒すというユニークな世界観が評価されたものです。

日本遺産に認定されたことを契機として、ここに住む皆様に町の魅力を再確認していただくとともに、国内外へ積極的に発信していくことにより、交流人口の拡大を図り、地域の活性化を目指すこととしています。

3　三朝温泉の取り組み

「三晩泊まって三回朝を迎えると元気になる」との評判からその名がついたとも言われる三朝温泉では、現在、旅館と町内の病院とが連携し、温泉を活用した鉱泥湿布や、温泉プール運動療法などの温泉療法等により、三朝の自然を満喫しながら温泉で自然治癒力を高める「現代湯治」の取り組みを進めています。

旅館に滞在しながら、総合病院で生活習慣病などをチェックして温泉療養を受けたり、自然あふれる三朝を散策、お好きな趣味などでゆったりとした時間を過ごすなど、ライフスタイルに合わせた過ごし方を提案しています。

また、現代湯治参加旅館では、三朝温泉の入浴アドバイザー「ラヂムリエ」が温泉の効能や入浴方法を適切にご案内しています。川の流れを眺めながら入浴できる河原風呂や、町中に点在する足湯や飲泉、そして昔ながらの湯治施設など、バラエティに富んだ温泉を楽しむことが出来ます。

今年 8 月には、「吸う温泉」として新しいラドン熱気浴施設もオープンし、三朝温泉の良さや魅力を知っていただく新たな施設として期待しているところです。

三朝温泉では今後も、情緒豊かな風景と、ここにしかない温泉地としての魅力をさらに磨き上げ、恵まれた温泉資源を活用した新しい「健康温泉リゾート」を目指して、観光関係者のみならず、三徳山などの文化財や、豊かな自然や良質な産物が取れる土地を生かした農林業と連携した取り組みを行なって参ります。

4　終わりに

健康に対する社会的関心の高まりを受けて、温泉地は単なる観光地の一つではなく、もっと大きな役割を果たせるのではないでしょうか。

温泉をはじめ、自然や文化等の地域資源を活用し、訪れる人が心身共にリフレッシュできるような機会を提供することができれば、社会に貢献できる温泉地となることで、温泉地自体も活性化できるものと考えます。

結びに、このフォーラムの開催に御尽力賜りましたＮＰＯ法人健康と温泉フォーラム、新潟県阿賀野市の皆様をはじめとする多くの関係者の皆様に感謝申し上げますとともに、御出席の皆様の御健勝と御多幸を祈念申し上げ御挨拶といたします。

宮元 陸

みやもと　りく

石川県 加賀市長

昭和 56 年　3 月　法政大学法学部卒業
昭和 56 年　4 月　衆議院議員森喜朗秘書
平成 11 年　4 月　石川県議会議員
平成 20 年　4 月　石川県監査委員
平成 22 年 11 月　石川県議会 副議長
平成 25 年 10 月加賀市長（1 期）
平成 29 年 10 月加賀市長（2 期）

「地域で活かす温泉ー生命と心のサンクチュアリー、温泉新時代へ」をテーマに、「健康と温泉フォーラム 2018 in 阿賀野市」が、ラムサール条約登録湿地「瓢湖」を有する自然豊かな新潟県阿賀野市において開催されますことを、心よりお祝い申し上げます。

1. 加賀市の概要

加賀市は石川県の南西端に位置し、16.5 ㎞に及ぶ美しい海岸線は越前加賀海岸国定公園に指定されています。また、加賀市、小松市、福井県勝山市の境界にある大日山（標高 1,368m）に源を発する大聖寺川・動橋川が日本海に注ぎ、それぞれの流域に開けた自然に恵まれた地域です。市内には四季のかおりが感じられるスポットが点在しており、年間を通して多くの観光客が訪れています。

春には大日山からの雪解け水が２つの川に流れ込み、中央公園、熊坂川、臨峰苑など市内の桜の名所で美しい桜が咲き誇ります。

北部の海岸線と南部に連なる山々は、それぞれ越前加賀海岸国定公園、山中・大日山県立自然公園に指定されており、美しい自然に触れ合える癒しの空間が形成されています。山では県民の森でキャンプやハイキング、海では「片野」「橋立」「黒崎」で海水浴を楽しむことができます。

大日山から日本海へと続く、大聖寺川・動橋川流域には鶴仙渓や柴山潟、加佐の岬など美しく豊かな自然があります。鶴仙渓にはこおろぎ橋、あやとりはし、黒谷橋という三つの橋が架かっており、季節ごとに違った表情を見せます。秋には周辺は燃えるような紅葉が橋を彩ります。

冬には山代、山中、片山津といった加賀温泉郷に冬の味覚や風情を楽しむ浴客が訪れ、美しい雪景色を堪能しています。また、ラムサール条約湿地の片野鴨池にはマガンやヒシクイ、トモエガモなどたくさんの渡り鳥が訪れ、鴨池観察館でその生態を観察することができます。

2．地域資源の磨き上げ

北陸新幹線金沢開業を見据えた首都圏への誘客施策とインバウンド観光の推進を中心とした戦略を進めるべく、第 1 次観光戦略プランを策定し、事業を展開してきたことにより、温泉地における観光入り込み客数は 2014 年の約 179 万人から 2015 年には約 200 万人にまで増加しました。

しかしながら、その後は、北陸新幹線効果が落ち着きを見せ始め、温泉地の入り込み客数は、2016 年、2017 年と微減傾向が続いております。

日本においては人口減少が著しく、全国的に国内旅行の需要が年々減少傾向にある中で観光地域間の競争も激しさを増し、国内誘客の難易度は年々高くなっていく一方で、海外からの観光客は増加傾向が続いており、本市においても年々増加している状況にあります。

本市は、全国屈指の山代温泉・山中温泉・片山津温泉を有し、2017 年 4 月に日本遺産に認定された北前船の歴史ストーリーが根付き、これに加え、大聖寺十万石の伝統文化、九谷焼や山中漆器に代表される伝統工芸、大日山系の山々や国定公園加賀海岸の美しい自然、豊かな土壌に育まれた美味しい食など、優れた資源に恵まれています。

これらの温泉・歴史・伝統・文化・自然・食など、加賀市特有の魅力的な地域資源を更に磨き上げ、観光客へ提供できる新たな観光メニューの企画開発を進め、受入環境整備や情報発信などの施策を戦略的に展開することで、誘客促進を図っております。

3．加賀市の取り組み

本市が有する、温泉資源、食、豊かな自然を活用し、昨年度、一般社団法人 ONSEN・ガストロノミーツーリズム推進機構が推進するウォーキングイベント「ONSEN・ガストロノミーウォーキング in 加賀山中温泉」を開催し、ウォーキングを通じて自然・歴史・文化が体感できる運動を行うことで、温泉地の新たな価値を見出す取り組みを行いました。

このような体験型観光を推進していくことで、国内のみならず、外国人観光客を見据えた誘客促進につながるものと考えております。

4．終わりに

市民の健康づくりには、安心安全な食、適度の運動、そして温泉は欠くことができないものと考えております。

古くから湯治に活用されてきた温泉は、地域住民の健康増進やコミュニティの形成に寄与してきましたが、新たな温泉の活用により市民の健康づくりはもとより観光振興にも発展するものと考えております。

この度、ここ五頭温泉郷を有する阿賀野市で開催される本フォーラムにおいて、地域で活かす温泉として様々な取り組みを検討され、市民の健康づくり、ひとづくり、まちづくりに繋がるものとなる事を期待しております。

結びに、フォーラムの開催に多大の尽力を賜りました NPO 法人健康と温泉フォーラム、新潟県阿賀野市ならびに関係各位のご努力に感謝申し上げ、ご挨拶といたします。

ふるさとへの愛着や誇りをもった児童を育てる取組教育

～４年生　「五頭の自然から学ぶ」(温泉の恵み)～　阿賀野市立笹岡小学校

１　はじめに

阿賀野市は、弘法大師空海が開いた五頭山を南に抱え、五頭温泉郷や白鳥の訪れる瓢湖、コシヒカリをはじめとしたおいしい農産物など、自然の恵みが豊かな地域である。

昭和５７年４月に四つの学校が統合してできた笹岡小学校は、学区に出湯温泉、今板温泉、村杉温泉の五頭温泉郷があり、また五頭山の伏流水として湧き出るたくさんの清水が点在している。古い歴史、多様な文化がある。

校庭には越後三清水の一つである名水「岩瀬の清水」があり、市内外から毎日多く人が清水を汲みに訪れる。

「湧きいづる　山の泉を引き入れて　先生と生徒も大切にのむ」中野正吾氏がかつて宮中歌会で詠んだうたのとおり、現在は、子供たちに利用され、地域の人たちや子供たちの手によって大切に守られてきている。

笹岡小学校では、地域の自然や文化、産業を学んだり伝統芸能を伝承したりする活動をとおして、児童のふるさとへの愛着や誇りの育成に力を入れている。

２　全校登山と温泉入浴（学校行事）

毎年９月下旬には、保護者や地域のボランティアの協力を得て、全校五頭山登山を行っている。全校が２０の班に分かれ、６年生のリーダーを先頭に１～６年生が声を掛け合い登頂を目指している。頂上からは蒲原平野や佐渡、粟島、飯豊連峰など雄大な景色が味わえる。登山後には「郷土の自然・文化の感得と故郷かけがえのない思い出づくり」という願いから村杉温泉旅館のご厚意により、温泉に入れていただいている。

登山の前には全校集会をもち、４年生が「五頭温泉」について全校にレクチャーする。ラジウム温泉の特徴や入浴方法、入浴マナーについて全校が学んだ。

登山後、疲れた体を温かい温泉で癒やす。「登山の後の温泉は気持いい。疲れが吹っ飛んだ」と子どもたちは大はしゃぎだった。

全校登山は、地域のボランティアや温泉旅館の皆様の温かいご協力によって成立する行事である。子どもたちは、感謝の気持ちをメッセージにまとめ、かかわってくださった方々に届けている。

３　４年生総合的な学習「五頭の自然から学ぶ」(温泉の恵み)

ねらい

五頭温泉郷の歴史、特徴を調べるとともに、温泉を守り、生かしている人々の苦労や生きがい、五頭温泉への思いに気付くことで、五頭温泉のよさや大切さを多くの人に伝えられる。

（２）学習の実際

５月、笹神地区にある五頭温泉郷について興味関心を深めるために、インターネットやパンフレットなどで温泉の歴史や効能などについて調べ学習を行った。７月、各温泉（出湯温泉、今板温泉、村杉温泉）を実際に見学し、温泉について知識を深めた。９月、八つのグループに分かれ、各温泉旅館に行き、施設の見学や温泉に携わる人々の思いや願いを聞かせてもらった。子どもたちは、自分たちで自慢できる温泉のよさを学び、できるだけ多くの人に伝えようととても意欲的に活動した。グループ毎に分かれ、複数の温泉旅館を訪問したことで、各温泉の違いや旅館毎の違いに加え、五頭温泉に関わる方の共通の思いや願い（泉質のよさとお客さんの健康や癒やし、おもてなしの心、豊かな自然を生かした空間と食事）に気づくことができた。

全校五頭登山前の、子どもの手による五頭温泉についての学習会（温泉の効能、入浴方法、入浴マナー）は、その後の入浴の際の事前学習となり、温泉文化の継承に繋がった。

10 月に行われる温泉フォーラム 2018 の発表内容は、五頭温泉の魅力、効能、歴史、創作ダンスなどである。これまでの学習を通して、子どもたちの五頭温泉郷を中心とした地域への愛着は非常に高まり、そのよさを一人でも多くの人に伝えたいという気持ちで一杯となっている。ぜひ、大勢の方に五頭温泉の恵みが伝わればと願っている。

基調講演「地域で活かす温泉ー新・湯治プロジェクト」

山本麻衣

やまもと　まい

環境省自然環境局
自然環境整備課
温泉地保護利用推進室長

山口県生まれ。平成７年環境庁（当時）入庁。以来、環境省本省、地方環境事務所等において主に国立公園や野生生物の保護管理を担当、前職は長崎県に出向し自然環境課長として勤務。今年４月より現職

1.「新・湯治」推進の取組を本格化！

健康と温泉フォーラム 2018 in 阿賀野市の開催に併せて、環境省とフォーラム共催で「新・湯治セミナー」を開催する機会をいただいた。ここでは、環境省が進める「新・湯治」推進の取組と本セミナーのねらいをご紹介する。

2.「新・湯治」の推進と「チーム新・湯治」

環境省では、「温泉地訪問者が、温泉入浴に加えて、周辺の自然、歴史・文化、食などを活かした多様なプログラムを楽しみ、地域の人や他の訪問者とふれあい、心身ともに元気になること」を「新・湯治」と定義し、温泉地や利用者への普及を図ることとしている。温泉地には、「新・湯治」を提供する場として、楽しく元気になるプログラムの提供や、環境づくりが求められ、環境省や行政機関には、「新・湯治」という考え方の普及や、「新・湯治」によるストレス軽減やリフレッシュ効果の把握などが求められる。

具体的な取組として、環境省では、「新・湯治」の考え方に賛同する地域、自治体、団体等を「チーム新・湯治」として緩やかにネットワークでつなぎ、互いに情報・意見交換することとした。今年４月からチーム員の募集を行ったところ、９月７日現在で 144 件の参加となっている。チームの活動としては、既に環境省ホームページでのチーム員名簿の公開、メールマガジンの発行を開始しており、今後、年数回程度のセミナーの開催、年１回の全国会議の開催を予定している。

今回の「新・湯治セミナー」は、この「チーム新・湯治」の主な活動の一つであるセミナーの第１回目と位置づけて開催するものである。

3.「新・湯治セミナー」のねらい

今回の「新・湯治セミナー」は、テーマを「地域で活かす温泉」としている。「新・湯治」は、「新」と銘打っているものの、環境省が提案するより前から、既に多くの地域で同様の考え方での取組が進められている。このため、パネルディスカッションでは、地域ぐるみで先進的な取組を進めている温泉地の事例をご紹介いただくとともに、今後「新・湯治」を進める上で、地域がどのような考え方で、どのような体制で取り組むべきかなどについて、意見交換を行うこととしたい。

環境省としては、今回のセミナーを皮切りに、「チーム新・湯治」の活動を本格化させたいと考えており、温泉地間や温泉地と企業などの交流が活発となり、温泉地の活性化や温泉の健康への活用などが進むことを期待している。

「新・湯治セミナー」のすすめ方

コーディネーター

坂本 誠

さかもと　まこと

NPO法人ローカル・グランドデザイン理事
公益財団法人　地方自治総合研究所　客員研究員

1.「新・湯治」の推進に向けて

本セミナーでは、「新・湯治」を提供する場としての新しい温泉地のあり方を検討します。

「新・湯治」の定義＝「温泉入浴に加えて、周辺の自然、歴史、文化、食などを活かした多様なプログラムを楽しみ、地域の人や他の訪問者とふれあい、心身ともに元気になること」（環境省）をふまえれば、「新・湯治」の実現に向けて、温泉地にはまずもって次の 2 点が求められていると言えます。

第１に、地域資源の再評価と再構成。すなわち、温泉とともに自然や歴史、文化、食など地域に内在する資源を見つめ直し、それらを総合して提供する努力が求められます。

第２に、地域社会の再評価と再構成。「新・湯治」の推進のためには、温泉地としての魅力を総合して提供する、地域としての主体的な取り組みが求められます。

2. 本セミナーのすすめ方～活動の紹介

そこで本セミナーの前半は、環境省温泉地保護利用推進室・山本室長から「新・湯治」の概要について基調講演をいただいた後、「新・湯治」に先んじて、温泉を核としながら、地域の様々な資源を見つめ直して、地域づくりに取り組んでいる各温泉地の取り組みをご報告いただきます。

鳴子温泉郷では、これまでの「現代版湯治」などの取り組みからさらに一歩進めて、「湯治文化ビジネス創造プロジェクト」として住民とともにこれからの温泉地のあり方を考え創造する取り組みが始まっています。

湯野浜温泉では、「湯野浜１００年計画」を掲げて、地域としての持続的発展をモチーフに、旅館どうしのみならず住民も巻き込んだ新たな挑戦がはじまっています。

そして本セミナーの開催地である五頭温泉郷では、本多静六博士の「村杉ラヂウム温泉風景利用策」を再評価し、地元の大学や企業、団体と連携しながら、温泉を核として、地域資源を活用した健康

昭和50年高知県生まれ。
（財）とっとり政策総合研究センター、（独）農研機構農村工学研究所、全国町村会を経て平成27年より現職。博士（農学）。
農山漁村地域の持続発展策のほか、道州制・市町村合併・地域自治組織など地方自治制度に関する研究を行う。

増進型保養温泉地づくりを目指しています。

3. 本セミナーのすすめ方～ディスカッション

本セミナーの後半では、次の２点について議論したいと考えています。

１点目は「『新・湯治』は何を目指すのか」。「新・湯治」は、医療・健康・福祉・文化…など、アプローチが多様なだけに、ややもするとその目指す方向が見えづらくなりがちです。そこで、本セミナーでご報告いただいたそれぞれの温泉地から、目指す方向性の確認や共有をどのように図っておられるのかを解説いただいたうえで、「新・湯治」の目指す方向性を、あらためて確認します。

２点目は「『新・湯治』をすすめるための体制づくり・受け皿づくりのあり方」について。昨年の関金フォーラムの総括講演にて、「地域とともにいきる温泉、温泉とともにいきる地域」と題して、「事業者相互のみならず温泉を取り巻く人びとの関係性を深めること」「温泉を通じた地域複合経営の視点をもつこと」の必要性をお話しましたが、これは「新・湯治」の推進体制の構築にも必要な視点です。本セミナーでご報告いただいたそれぞれの温泉地での経験をふまえて、「新・湯治」をすすめるうえでの温泉地の地域としてのあり方、人びとの関わり方を考えます。

限られた時間ではありますが、議論を通じて「新・湯治」の歩みを進める一助となるよう努めます。

新・湯治セミナー　パネルディスカッション

国民保養温泉地「五頭温泉郷」の紹介と取り組み

荒木 善紀
あらき　よしのり

健康と温泉フォーラム　理事
健康ビジネス協議会　理事
五頭温泉郷旅館協同組合　理事長
新潟県旅館組合　理事
村杉温泉組合　組合長
笹神商工会　理事　（観光部会長）

１五頭温泉郷（出湯温泉・今板温泉・村杉温泉）と周辺環境

五頭温泉郷の位置する新潟県阿賀野市は、市名の由来となった大河「阿賀野川」が流れ、県立自然公園に指定されている「五頭連峰」を背に、のどかで美しい田園風景が広がる自然豊かなまちである。

市の観光を代表するものとして、ラムサール条約登録地で有名な白鳥の湖「瓢湖」があり、毎年５千羽を超える白鳥が飛来し、優雅な姿を間近で観察することができる。

また、多彩な登山ルートを持ち、子供から高齢者までその力量に合わせて自然散策やトレッキング、そして本格的な登山までを楽しめる五頭山があり、全国森林浴の森百選の山麓一帯には、薬用植物園やキャンプ場等の森林レジャー施設が整備されている。

阿賀野市は、稲作を中心とした農村地帯で、阿賀野川や五頭連峰から流れ出る豊富な水と肥沃な台地で高品質で良食味のコシヒカリはもとより、野菜や山菜、果物、牛乳（県酪農発祥の地）等、環境保全型農業による安全で安心な農産物のほか、３軒の蔵元を有する地酒や地ビール、乳製品、和洋菓子、餅、豆腐、油揚げ、味噌、しょうゆ等の特産品も数多くあり、まさに食の宝庫で、四季を通じて安全で安心な「食」が提供されている。

また、「健康寿命日本一のまちづくり」を目標に掲げる阿賀野市は、「阿賀野スタイル」健康福祉プロジェクトを立ち上げ、健康づくりや介護予防を目的に「ノルディックウォーキング」や「ヨガ」そして「ラジオ体操」等の多様な健康づくりプログラムを展開し、市民に定着してきている。

当温泉郷は、こうした「食」「運動」に「温泉」や「自然環境」を結び付け、温泉地にある「食と緑の交流センターうららの森」を拠点に、「温泉」「森林浴」「自然散策」「ウォーキング」「トレッキング」「登山」「自然体験」「健康食」等を総合的に提供できる健康増進型保養温泉地づくりに努めている。

•出湯温泉

809年に弘法大師が湯杖をついて湧出させた伝説が残り、開湯1200年の県内最古の温泉地と言われている。
アトピー性皮膚炎に効果がある温泉地として知られ、治療に訪れた人がその効果から定住している事例も多い。

•今板温泉

出湯温泉と村杉温泉の真ん中に位置し、弘法大師が五頭山を開いた時に自噴していた源泉を発見したのがはじまりといわれ、弘法大師によって刻まれた薬師如来像がまつられる薬師堂を持つ一軒宿の静かな温泉地である。

•村杉温泉

1335年に足利家の武将であった荒木正高が戦乱を逃れてこの地に着き、薬師如来のお告げにより発見したと伝えられる。

大正3年には新潟大学の薬学博士中山蘭教授によって温泉成分が分析され、ラジウム含有量が世界レコードにあるとまで発表され、当時の新聞で大々的に報道された。

今も、日本有数のラジウム含有量を誇り、特に婦人病に効果があることから、「子宝の湯」として知られている。

２　五頭温泉郷の主な取り組み

（１）五頭温泉郷エコ計画

常に新鮮、そして安全で安心な食を提供できる環境に配慮するために、五頭温泉郷内で使用するシャンプーや石鹸を生分解性の高いものに替え、また使い捨てていた割りばしを繰り返し使える天然木の塗り箸に切り替える等、早くから環境対策事業に取り組み、環境省環境管理局水環境部長や阿賀野川水系水質汚濁対策協議会から優良団体として表彰された。

（２）村杉ラヂウム温泉風景利用策の復活

大正１０年、後に日本の公園の父と言われる東京帝國大学林学博士、本多静六教授が当温泉地を訪れ、ラジウム温泉と雄大な自然環境を活用した壮大なる計画「村杉ラヂウム温泉風景利用策」が提案された。

この提案には、温泉地一帯の土地利用計画が示された平面図も添付され、ラジウム温泉の効能はもちろん、森林浴ができる登山道、遊歩道、展望台等の整備や活用法、そして名物品や土産物に至るまで、時代を見越した理想的な温泉地整備計画が描かれていた。

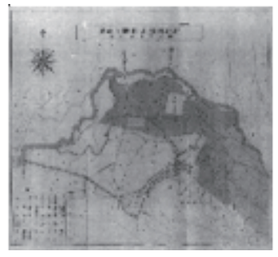
五頭温泉郷では、100年近くも眠らせていたこの構想の実現を目指し、地元関係者に専門家を交えてワークショップを展開し、遊歩道やホタルが生息できる水辺環境整備をはじめ、薬用植物や草花の植栽等、健康づくりの要素を取り入れた魅力ある温泉地づくりに努めている。

（３）「健康ビジネス連峰政策」への参画

新潟県が推奨する「健康ビジネス連峰政策」に参画し、ラジウム温泉と地域資源を最大限有効活用したヘルスツーリズムやアンチエイジングキャンプ等に取り組み、大学や健康関連機関との連携により「エビデンス」の取得等を図りながら、健康増進型保養温泉地としての「ブランド化」を目指している。

◇『ラジウム温泉でリフレッシュ&リラックス』

新潟薬科大学や新潟バイオリサーチパーク㈱との連携によって、新たな温泉利用型健康増進プログラムを開発し、提供している。
内容は、温泉入浴指導員による正しいラジウム温泉の入浴法の説明や、食薬同源の健康料理の提供、ストレッチ運動や健康ヨガの体験、専門家を招いての健康講座等、「癒しと健康増進」をテーマに誘客を図り、定期開催している。



◇『アンチエイジングキャンプ』

アンチエイジング(老化予防)に関する研究の第一人者、順天堂大学大学院白澤卓二教授監修のラジウム温泉と周辺の自然資源を活用した２泊３日のアンチエイジングキャンプを開催している。

内容は、白澤教授の講演をはじめ、プロスキーヤーで登山家でもある三浦豪太氏による川魚掴み取り体験や沢登りといった遊び（生きがい）体験、トータルフィットネスコーディネーターの中尾和子先生によるボールエクササイズによる運動体験、温泉入浴指導員による正しい温泉入浴講座等、３日間に亘ってすべてに健康をテーマしたプログラムを提供し、ソバ打ちやエゴマ絞り、薬草入りの餃子作り等、地元食材を生かした体験メニューも取り入れている。

特に食に関しては、白澤教授監修によってカロリーや繊維質が管理され、フードマイレージを重視したアンチエイジングメニューを提供している。

◇『たんぱく調整・食と学びのツアー』

市内企業(株)バイオテックジャパンと連携し「たんぱく調整による食と学びのツアー」を開催している。

内容は、たんぱく調整による新たな医療食や介護食の研究開発をしている(株)バイオテックジャパンの工場見学や、その技術を生かして、地元食材を使用した医療向け新会席料理を提供し、併せて当地の自然とラジウム温泉で身体の中と外の両面からリフレッシュやリラックスをしていただくツアーを開催している。

◇『ラジウム温泉浴による健常成人の循環応答への影響調査』

一般社団法人健康ビジネス協議会との連携事業で、新潟薬科大学産官学連携推進センターの平山匡男教授によって「ラジウム温泉浴が健康成人の循環応答に及ぼす影響調査」が行われ、ラジウム温泉が、入浴中及び入浴後の血流依存性血管拡張反応率（FMD%）と血管拡張径を増加させ、更に血圧の低下や自覚的体感も向上させる利点もあることを見出し、新潟医学会誌に掲載された。

◇健康ウォーキングイベントの定期開催
『三浦豪太と登る五頭山健康ウォーク』

豊かな自然環境と食を活かし、運動を盛り込んだ健康ウォークイベントを開催している。

食事には薬膳料理が提供され、気軽なトレッキングから本格的な登山まで、参加者の力量に合わせたコースに参加することができる。

『WALK＆EAT五頭温泉郷～秘密の散歩道～』

温泉街散策、地域グルメ、景観、温泉を体感できる、五頭温泉郷発の体験型ウォーキングイベントを開催している。

◇「新潟リトリート」

作曲家でサックス奏者の日比野則彦氏をはじめ、著名演奏家による音楽と自然・食・温泉を結びつけるツアーを企画し、五感の感動を通して新しい自分を発見するツアーを定期的に開催している。

３　国民保養温泉地の指定を活かした五頭温泉郷の今後の展開

（1）新・湯治プロジェクトへの参画（環境省）

環境省が推進している「新・湯治」プロジェクトに参画し、温泉と温泉地を取り巻く自然・歴史・文化・食のすべてを提供して滞在できる温泉地の環境づくりに努めます。

この五頭を舞台に、豊かな自然環境を活かした遊びや文化体験を提供している「一般社団法人五頭自然学校」と連携してチーム新・湯治を結成し、元気になれる温泉地での様々な過ごし方を提案していきたい。

（2）国民保養温泉地の指定を活かした温泉地のブランド化

平成２８年５月、五頭温泉郷は環境省から全国９３番目の国民保養温泉地として指定を受けた。

温泉は、日本国内においても「行ってみたい旅行タイプ」の１位になる等、魅力的なコンテンツであることは言うまでもなく、温泉を単なる「観光」のみならず「滞在、体験を通じた療養、健康増進を図る場」へと転換し、温泉の魅力の再発見とブランド化への取り組みを進めたい。

五頭温泉郷は、新潟県が実施する観光地満足度調査において、県内温泉地の中で度々総合満足度第１位に選ばれている。

また、全国の国民保養温泉地を対象に、平成２８年度から国（環境省・観光庁・内閣府・経済産業省）の働きかけで実施されている「温泉総選挙」では、スポーツリハビリ部門やリフレッシュ部門・ファミリー部門などにおいて、連続してベスト３を獲得するなど、高い評価を獲得している。

こうした結果はたいへん喜ばしく、励みになるものではあるが、直接的に当温泉郷への入込客数の増加に繋がってはおらず、観光情勢は益々厳しさを増している。

国民のニーズは日々多様化し、また観光地の果たすべき役割も多岐にわたる中、五頭温泉郷では、地域の自然・歴史・伝統・文化等の再確認、再発見、再探求に努め、点在する豊富な資源を結び付けて有効活用することにより、この地域ならではの付加価値を付けた「五頭温泉郷ブランド」を確立することが急務となっている。

併せて、今後は少子高齢化が全国的に課題となる中、福祉や介護に対する取り組みも進め、社会問題にも貢献できる健康増進型保養温泉地づくりを推進するものである。

国民保養温泉地「鳴子温泉郷」の紹介及び取り組み

遊佐 久則
ゆさ　ひさのり

川渡温泉旅館ゆさ 代表取締役
川渡温泉観光協会長
鳴子温泉郷観光協会 副会長

昭和36年9月23日生
昭和56年　東北測量専門学校卒業
昭和56年　富士測量㈱入社
昭和61年　旅館ゆさ創業

１．温泉地の概要

鳴子温泉郷は鳴子温泉，東鳴子温泉，川渡温泉，中山平温泉，鬼首温泉の５つの温泉地の総称で，宮城県大崎市北西部の山形県と秋田県に接する山あいに位置し、川渡温泉を除く４つの温泉は栗駒国定公園に含まれる。鳴子峡、間けつ泉，カルデラ湖である潟沼などの自然景観、日本で初めて日本人技術者だけで建設されたアーチ式ダムである鳴子ダムや「奥の細道」で知られる、芭蕉の句碑や尿前の関所跡などの名所旧跡や、春は里山の散策やウォーキング，夏には渓流つりやキャンプなど，秋には色鮮やかな紅葉，冬はスキーと一年を通じ楽しめる。

特産品としては宮城県を代表する伝統的工芸品として「鳴子こけし」や，380年余の歴史を持つ「鳴子漆器」があり，「全国こけし祭り･鳴子漆器展」をはじめ､菜の花フェスティバル、食楽まつり、鳴子ジャズフェスティバル、などのイベントも多く開催されている。

鳴子温泉郷は開湯千年の歴史と，370 本以上の源泉数を誇り，分類される泉質のうち，単純炭酸泉と放射能線以外の種類が存在し、共同浴場、各旅館の泉質が異なる事から、多彩な泉質を巡る「湯めぐり」を目的にした入浴客も多く訪れる。

また川渡温泉，中山平温泉，鬼首温泉は、昭和 35 年に「奥鳴子・川渡」として国民保養温泉地に指定されていましたが、現在は鳴子温泉郷の背景の変化もあり環境省による見直しを機に、再申請し平成 27 年に「鳴子温泉郷」として 5 地区全体が指定を受けるに至ってい

ます。

2、5 つの温泉地

鳴子温泉郷は「かっけ川渡，かさ鳴子」といわれ，古くから保養，療養の湯として親しまれ，農閑期，漁業の合間に骨休めの湯治場（保養地）と連泊型の宿泊地であったが，時代背景が変わり 5 地区それぞれが特徴を持った温泉地に発展した。

鳴子温泉は中心部にあり大型ホテルも建ち近代化され歓楽的要素もあったが，現在は時代のニーズに伴い足湯・手湯の設置や湯めぐり広場の整備，温泉たまご工房，野菜乾燥室などの温泉のエネルギーを活用した施設などの設置を行い，今後の模索をしているところである。

「奥鳴子・川渡国民保養温泉地」として指定されていた鬼首温泉は高原リゾート地として発展し，中山平温泉，川渡温泉においては施設のリニューアルはされながらも大きな変化はなく，現在でも湯治場の風情が残っており，現代版の保養地としての環境整備等を地道に継続し，サイクリング・お散歩マップなどの作成やレンタサイクルなど自然環境を生かした誘客活動を行っている。

東鳴子温泉においては現在でも変わらず湯治（自炊）が多く残っている地区で，スポーツや農林業体験などを組み合わせた現代版湯治の提案を多く行っている地区である。

全体としては様々なイベントの開催の他、旅行ニーズの変化などから現代版湯治や温泉療養プランなどの取り組みも行ってきましたが、時代の変化に対応しきれず宿泊数は大きく減少しているのが現状です。

＊＊＊現代版湯治とは＊＊＊

主に自炊をしながら長期滞在する伝統的湯治に対して，滞在期間は短めで通常の食事やヘルシーな食事の提供を受けながらの静養はもちろんのこと、積極的に地域の自然や歴史文化に親しみ，農林業や文化体験などを通じて地元の人との交流も楽しみながら心身の健康増進、リフレッシュを行う時代背景に合わせた湯治

3、湯治文化ビジネス創造プロジェクト

5 地区のそれぞれ取り組みはあるものの、鳴子温泉郷エリアの戦略軸を決め行動プランを策定することの重要性の認識により、鳴子温泉郷の原点である湯治文化、温泉力（多彩な泉質や効能，良質な温泉）、豊かな自然環境を活かし、ベースとなる「運動」と「温泉」を組み合わせた健康増進型プランを軸とし､関連する「医療連携」「癒し」「リフレッシュ」「食」「文化」「体験」「学び」等を見直し、既存の取り組みの強化、新規事業（収益事業）の立ち上げなど来訪時における過ごし方の提案と実行を行うプロジェクトです。

保養温泉地としての、これからの鳴子を創造して行くにあたり、リフレッシュの分野から健康増進、療養の分野までと幅広く、ニーズや志向も多様化しており、様々なプランの提案が必要とされています。　同時に物見遊山の観光は過ぎ、人々の暮らしそのものが観光資源となっている中で、人口減少の課題もありますが、観光や生活は密接に関連しているので、住民と共に考えこれからの豊かな鳴子温泉郷を一緒に考え創造して行きましょうと言う考えのもと、プロジェクトでは検討の結果「現代版湯治」を改め次のようなフレーズで展開を行っています。

ゆとくらし

湯治によって栄えてきた鳴子は、文化、人、物の交流の場であり、温泉とともに暮らしがあった。住む人には温泉とともにあるこれからの豊かなライフスタイルを、訪れる人には温泉との関わりが豊かなライフスタイルの一つとなるように、一緒に考え提案し、未来を創りだして行こうじゃないかと言う考え。

発案者がリーダーとなりチームを組み実行していますが、主な内容は下記の通りです。

ウォーキング関連（健康増進型の提案）
「温泉と適度な運動で健康になろう」と言う提案で、温泉郷の住民意識の向上、市民の健康の意味も含め公民館との連携も行っている。また、既存ウォーキングツアーの他、新たに鳴子ダム直下コースも設定し、GW のすだれ放流ツアー、紅葉シーズンのウォーキングツアーの商品化を行っている。（鳴子ダム：日本土木学会　推奨土木遺産認定）
同時にノルディックウォーク指導員、入浴指導員の増強も行っています。

アクティビティー関連（体験型の提案）
アウトドアスポーツ体験の検討、実施を目的とし「ナルコ・アース・スポーツ」を立上げ、観光スポットである潟沼（カルデラ湖）や荒雄湖（ダム湖）を活用し有料にてＳＵＰ（スタンドアップパドルボード）体験を行っています。話題性、情報発信、事業採算も含め一定の成果がありまた、相乗効果で潟沼を訪れる観光客も増え、滞在時間も長くなり結果として貸しボート及び売店の売上アップにもつながっている。その他、外国人客を対象としたスノーシューツアーも試験的に実施しています。

キッチン菜の花（食の提案）
商店や食事処などが減少してきている中、12名の主婦がランチを主体とした食事処「キッチン菜の花」立ち上げました。鳴子ダムカレーを考案し好評を得ている他、現在は地元食材を使ったピザに挑戦中でより特色を出し、灯りを消すまいと奮闘しています。

さとのわ（食と体験の提案）
「さとのわ」とは女性Ｉターン者が主体となり都会と田舎を結ぶ活動で、古民家を借り「里山カフェ」を開店、経験をもとに現在は自前店舗の建設計画進行中です。またわら細工体験、自然散策、地元の主婦などを講師とした食の体験プログラムなども行い、薄れていく「田舎ならではの」の部分の掘り起しも行っている。

温泉と読書（動に対して静の文化的な提案）
温泉と読書はもともと相性の良い組み合わせであり、プロジェクトでは国文学研究資料館館長ロバート・キャンベル氏の協力のもと、芥川賞作家　朝吹真理子氏をお招きした講演会の開催、「湯とアートが鳴子で出会う」と題し国文学研究資料館のワークショップを大崎市共催で開催するなど積極的に活動を行ってきました。
旧病院であった建物を活用し「なるこ湯よみ文庫」と言う拠点を整備、間もなく発信が始まる予定であり、ただ単に本を読むと言う事だけでなく、それをキーワードにした過ごし方提案を現在も模索中です。
東京大学温泉サークル OKR と「ワカモノ湯治」と題し現代の若者が考える湯治の意見交換を継続して行なっており、その時に英語版でも作成した「ワカモノ湯治」の冊子は湯治や泉質と言ったものがわかりやすく表現してあり、外国人向けツールとして活用。
他にも、一汁一菜シンプル湯治ステイ、断食湯治、味噌づくり湯治、などのモニターツアーの開催や、ご当地サイダー「鳴子温泉　湯上りサイダー」の開発などを行っています。

4、おわりに
鳴子温泉郷は開湯千年と言われます、時代背景が変わっても変わらなかったニーズは「癒し」であり、人々は温泉にそれを求めてきました。それで十分とう事ではなく原点はおろそかにせず、不足分は知恵を出し合い、良いものがあれば上乗せして補っていこうと考え今迄も、様々な試みは行ってきましたがなかなか効果を上げることが出来ずにいました。
そんな中、新・湯治プロジェクトは私たちにとっても心強く、個別バラバラに発信していた声がまとまり大きな発信力となり、効果を出していく事を期待しているところです。
また、観光のみでなく関係部署が多岐に絡み合う為、理解浸透するまでは時間を要し簡単にいく事ではありませんが、発信していく事でまた何かが見えて来る事も期待したいところです。

「湯野浜１００年株式会社」の取り組み

阿部 公和
あべ　きみかず

湯野浜１００年株式会社
取締役

1969 年山形県鶴岡市生まれ
地元高校卒業後、
早稲田大学社会科学部入学、
1992 年卒業後渡英。
1993 年帰国後
（株）亀屋ホテル入社。
2009 年同代表取締役に就任。
湯野浜温泉関連組織の役員を歴任。
2018 年湯野浜 100 年株式会社取締役就任。

（春の肘折温泉の様子）

1. 始まり
　１５年前、湯野浜温泉では取り組みがばらばらであったり、世代間の考え方の違いがあったり、様々な問題を抱えていました。そこで旅館組合の青年部を中心に、湯野浜に１００年前も、今も、そして１００年先も存在する価値は何かを問うところから考え始める事業を立ち上げました。そしてその価値とは「海・白浜・温泉」であり、この価値からぶれずに取組んでいく「湯野浜１００年計画」を企画実行する架空の会社として「湯野浜１００年株式会社」を造りました。理念の共有と小さな取組の失敗と成功を繰り返しながら、少しずつ地域がまとまっていきました。そして迎えた平成２６年、温泉に関しての大きな転換期を迎えます。

2.CO2 削減→温泉熱利用→温泉インフラの更新
　湯野浜温泉では平成２６年度、環境省の〈平成２６年度大規模 CO2 削減ポテンシャル調査・対策提案委託業務〉の対象地域として指定して頂き、業務受託先の三機工業とアールアンドディーアイスクエア、そして鶴岡市、金融機関、学識経験者等により湯野浜温泉全体での CO2 削減の可能性の調査、検討がなされました。その結果、まず地域全体の取り組みとして、老朽化してきている集中管理システムを一新し、資源保護の観点からも持続可能な温泉量を効率的温度で配湯すると同時に、熱交換システムを導入し温水も集中給湯すれば、年間かなりの CO2 削減の可能性が示されました。また個別施設の取り組みとして、各施設の現状に応じた熱源等の設備の入替、全体の取り組みと連動した温泉エネルギーの活用、節水対策等を行うと、こちらでもかなりの CO２の削減の可能性が示されました。そこで全体の取り組みと個別の取り組みを一体で行い、より効果的な事業とすることの有効性が示されました。また今回の事業では、単に地域での CO２削減の可能性のみならず、そのことをフックにして、如何に地域を活性化させていくかも検討されました。その結果、湯野浜温泉の本質である「海と白浜と温泉」を活用したクア・エコビレッジが構想されました。またこの事業を具体的に推進していく為のスキームを行政との連携、資金の調達と回収まで含めて検討されました。平成２７年度、この調査･対策提案を受けて、アンドディーアイスクエアとの共同事業として環境省の協力の元、事業実施の為の詳細検討を行いました。その結果、地域全体で温泉の未利用熱を活用することによる８７９トンのＣＯ２削減と、地域の活性化を目的とする事業計画を策定しました。
　そして平成２８年５月に湯野浜温泉源泉有限会社は事業実施の為の新会社、湯野浜源泉設備保有株式会社を設立しました。そしてその会社を代表事業者とし、鶴岡市（下区共同浴場）、旅館、民宿の１２施設が共同事業者となる事業体を組織し、環境省の「省ＣＯ２型社会の構築に向けた社会ストック対策支援事業」としての「２８年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金」の事業採択を得て、鶴岡市による出資と補助金、山形県による鶴岡市を経由しての間接補助金、きらやか銀行による本業支援としての旧きらやか銀行湯野浜支店の譲渡と融資、三機工業との工事契約、アールアンドディーアイスクエアによる業務支援を得て、平成２８年９月の事業実施の運びとなりました。短い工期、冬の厳しい自然環境での工事でしたが関係者の皆様のご努力と、地域住民の皆様のご理解、ご協力のもと無事に平成２９年２月の竣工を迎えることができました。１ か月間の試験運用を経て平成２９年４月より新システムによる温泉と温水の供給を開始しました。お陰様で平成２９年度は１３４５トンの CO２の削減を行うことができました。

3. 湯野浜１００年株式会社の設立
　小さな取組みの失敗、成功の繰り返しでしたが、CO2 削減事業を通しての地域のまとまりと、様々な方々の協力のお陰で、本年ようやく湯野浜源泉有限会社、湯野浜温泉旅館協同組合、湯野浜温泉観光協会の出資により、正式な株式会社として「湯野浜１００年株式会社」を設立しました。湯野浜１００年計画に基づく湯野浜温泉地区の持続的発展が可能なコミュニティーの形成、湯野浜温泉来訪者の増加、湯野浜温泉各組織が連携して進める総合戦略の立案と運用管理を進める為に、地域地域開発部、未来開発部、コミュニケーション部の３部門とブレーンの皆様により組織する地域運営会社として機能させていきます。

4. リビングラボ＋未来の教室＋国民温泉保養地＝新・湯治

温泉インフラが整い、次はそれを活用したソフトの確立です。平成２９年度の経済産業省のリビングラボプロジェクトに参加させて頂き、地域の普遍的価値である「海・白浜・温泉」を基本としたクア・エコビレッジ構想と地域発の新たな価値である「ヒューマノーム解析」を融合させ、地域住民が旅館で働き､海と浜で運動し､温泉に浸かり､地元素材を食し、その結果としての健康の在り様を「ヒューマノーム解析」で検証するという構想を造りました。平成３０年度には経済産業省の未来の教室創出実証事業を受託させて頂きました。この事業はリビングラボでの構想を具現化していく過程で関わった私たちの考え方、行動がどの様に変化したかを検証していく取り組みです。

また本年６月には環境省より国民温泉保養地の認定を頂きました。そこでリビングラボと未来の教室と国民温泉保養地の概念を融合し、持続可能な地域の在り様を浮き彫りにできればと考えています。更にこの取り組みにリカバリーというコンセプトを加え展開することにより、来訪者の増加につなげていければと考えております。

湯野浜１００年株式会社のこの様な取り組みが「新・湯治」の一つのあり様ではないでしょうか。今日ここに集い、ご縁を頂いた皆様と闊達な意見交換をさせて頂ければ幸いです。

総括講演

統合医療と温泉の可能性

高山 真

たかやま　しん

東北大学病院漢方内科
副科長・医局長
東北大学病院
総合地域医療教育支援部 副部長

私は山形県の肘折温泉の出身で、家は旅館をしておりました。中学まで肘折温泉で育ちましたが、よく父親に山に連れていてもらったのを覚えています。生来体が弱くアトピー性皮膚炎に悩まされておりましたが、毎日温泉に入っていたところ結果的に中学を卒業することにはきれいな肌になり、現在に至っています。

肘折温泉は肘折カルデラの中にあり、開湯は奈良時代の大同２年（807 年）、豊後国出身の源翁がこの地を訪れた際、老僧より肘を折った際に治療した温泉を教えられた、という伝説が残っています。名前の通り、打ち身や切り傷、神経痛などに効果があり、筆者が生活していた昭和の頃は、農繁期が過ぎると多くの農家の方々が米を持ち自炊をしながら長期間湯治に来ていました。肘折温泉で育ち、自然に慣れ親しんで過ごしていた期間が長かったことからか、将来は自然を活用した医療ができればと考えるようになり、医師になってからも東洋医学や自然を取り入れた医療の勉強を続けてきました。

近年の西洋医学１００年は、物質の同定や精製技術、診断機器の高度化が進み急激に発展してきました。特に薬は生薬などから物質が単離され生成されことにより様々な用途に使用されるようになりました。また、CT や MRI、内視鏡など様々な画像診断が発達し、非常に低侵襲で体の中を見ることが可能となってきました。

これらの進歩により、西洋医学の診断技術、治療技術は飛躍的に進歩し、多くの恩恵を得るまでに至りました。一方で、近年では西洋医学的治療や対応が難しい病態も増え、社会的な問題にもなってきています。特に慢性痛については、西洋薬の消炎鎮痛薬は効果が乏しく、現在では脳や心に関連する疾患ととらえられています。うつ病との関連も指摘されています。

私は、歴史的に自然療法を取り入れてきたドイツのミュンヘン大学ペインクリニックに留学する機会があり、ドイツの自然療法を見る機会を得てきました。ミュンヘン大学ペインクリニックでは、西洋医学的治療で十分な治療効果が得られない慢性痛や心身症の患者さんを対象に、４週間の自然療法プログラムを行っていました。その治療法には、鍼治療、呼吸療法、芸術療法、物理療法、リハビリテーション、精神療法、気功療法、音楽療法、栄養学指導などがあり、患者さんはこれらの治療をすべて受け、その結果自分に合うものを選択して以後外来で継続するというプログラムでした。ここでとても印象に残ったのは、患者さんが積極的に症状を向き合い治療に参加しているという点でいた。ここで学んだことは、慢性的な症状には、生活習慣の乱れ（不摂生や運動不足など）や心身のアンバランスが関与していることがとても多いということでした。

総括講演「統合医療と温泉の可能性」

（ミュンヘン大学ペインクリニックで行っている自然療法の内容）

（バーデン・バーデンの街並み）

生活習慣の乱れや心身の不調は現在の日本でも問題となっています。現代の都会の生活では仕事や付き合いなどで無理をすることが多く、ストレスを長期間受ける反面、ゆっくり休める時間は限られてきます。若いうちは無理もできますが、その状態が長期間にわたると心身の不調をきたし、うつ病や慢性痛などの病態を惹起してしまいます。現在の日本は超高齢社会となり、高齢者はよりストレス耐性が低くなり、生活の若干の不摂生や変化でも体調を崩しやすくなります。

高齢者でも健康で元気に生活している方々も沢山います。そこで違う点は、身体と心のメンテナンスを定期的にしているかどうかにあると思います。生活習慣では、朝の覚醒と夜の睡眠のリズム、バランスを考え、食事もカロリーだけでなく野菜やたんぱく質もしっかり摂取していく必要があります。睡眠＝吸息、食事＝栄養になりますが、心身を元気に維持するには定期的な運動が必要となります。運動で筋肉や骨に刺激を与えて、食事で栄養を与え、睡眠で回復の時間を与えます。これらのサイクルにより沢山の薬を飲まなくても健康でいられる体を作り維持することが可能となります。また、毎日同じ生活リズムを続けているとマンネリ化してきます。そこで自然豊かな温泉地にしばらく滞在して環境を変えつつ、温泉にゆっくり入り、人間本来の自然治癒力や感性を呼び戻すのもとてもよい転換になります。ドイツには有名なバーデン・バーデンという保養地域があり、そこには劇場や美術館、博物館などの娯楽施設があり、散策することのできる公園や散策路も整備されていました。リラックス効果と温泉の効果の両者があり、ヨーロッパの方々に好まれておりました。ドイツでは保養は当たり前でまとめて２週間休暇を取り温泉に行くのは当たり前のことでした。

日本は火山国であり、全国各地に温泉があります。病気後の静養だけではなく、健康維持という面からも心身のリセット、免疫力向上の目的で温泉を定期的に活用していくことが、現代日本人の新しい生活スタイルになるのではないでしょうか。そのためには、温泉地も現代に合わせて変わる必要があるかもしれません。散策ができて温泉地ならではの清らかな空気が沢山吸える環境、高カロリー＋お酒＝宴会だったこれまでの料理から地元の野菜、タンパク質も取り入れて偏りのないものに（薬膳料理なども良いでしょう）、四季の移り変わりを体感できる環境、地元の方々の真心、温泉の良さを十分に満喫できる現代風の温泉地が望まれます。

特別寄稿

五頭温泉郷の「温泉発見・開湯伝説」と次なる課題

前田 勇

まえだ　いさむ

立教大学名誉教授
健康と温泉フォーラム顧問

はじめに

五頭温泉郷での「五頭」とは，山形･福島･新潟の県境に位置する飯豊連峰の前山にあたり，越後平野の右側に位置する五つの山（峰）の総称である。それらは一の峰から五の峰までからなり，いずれの峰も 860 ～ 910m ほどの同じ位の高さ（平均 881m）であり，五つの頭が並んでいることから古くから五頭と呼ばれてきた。現在の新潟県阿賀野市から南隣に位置する阿賀野川沿いの阿賀野町に跨がっており，海岸（日本海）から 20 ㎞，阿賀野川の近接地点から 10 ㎞程度の距離にあり，比較的平坦でもあり，人びとの往来も古くからみられていた。温泉の発見・開湯に関して，五頭温泉郷には古い時代からの伝承が残され，越後国（現在の新潟県）最古の温泉地であると称されてきた。

本稿は，五頭温泉郷の温泉発見・開湯伝説に登場してくる人物とその意味を考察し，現在まで五頭温泉郷を育て，守ってきた人たちの“思い”を考察したものである。

１．開湯伝説の意味するもの

温泉大国として知られているわが国には，それぞれに特徴のある温泉が各地に存在している。温泉のすべてが発見・開発に関する記録や逸話を有しているとは言えないが，古くから人びとに利用されてきた長い歴史のある温泉は各地に存在している。

温泉の発見・開湯伝説には，建国神話とそれに繋がる逸話，ある時代に活躍した著名な武将や僧侶あるいは芸術家や学者などの活動や業績に基づくもの，また人間に比較的身近な存在であった動物類に関わる物語などがある。それらには不可思議な事象をもたらす超人的力をもっ

立教大学名誉教授，（元）立教大学大学院観光学研究科博士課程主任，博士（社会学）
日本観光研究学会・名誉会員（元会長），日本温泉地域学会名誉会員

専門分野：観光行動学・観光心理学，観光文化論，温泉文化社会学，サービス理論
主要著書：『観光とサービスの心理学』『サービスの科学』『現代観光総論（編著）』『現代観光とホスピタリティ』（他多数）

ていた，神話などに登場する英雄，卓越した能力によって人びとのためになる役割を果たして偉人の言動，さらに（鳥や獣などが）人間とは異なる行動によって人間に何かを伝えたものもあり，経験者や発見者がそれを他者に伝えて，さらにその繰り返しによって，多くの人びとに広がっていったものと考えられる。

建国神話とそれに繋がる逸話は，『古事記』の国造り物語に多くみられ，これらに類する発見・開湯伝説は，古く時代から利用されてきた温泉にみられる。古代国家が設立して，仏教がわが国に伝来するようになると，宗教に基づく社会事業家や新しい宗派の創設者や指導者などの僧侶が主要な位置を占めるようになる。その中でもわが国の温泉発見・開湯伝説に多く登場するのが，奈良時代後期に社会事業とくに大仏造営に貢献した「行基」と，平安初期に仏教界で活躍し，死後 100 年後からは「弘法大師」となり，日本（人）を守る存在として国民的敬慕の対象となった「空海」の二人であった。

ただし後にもふれるように，温泉発見・開湯伝説には，温泉の知名度・効能などが人びとに広く伝わることを意図して，行基・空海（弘法大師）など著名な僧侶の名を用いたと思われる事例も数多くみられる。それらの中には，年譜的には辛うじて成立しうる年度に発見・開湯時期をあてはめているもの，大先達に対する畏敬の念を表そうとして名前を利用したもの，などと解することができるものもある。したがって，一概にそのすべてを盗用と評するのは不適当な場合もあり，行基・空海といったビッグネームが用いられた意味を考えることが必要な事例もある。

動物類に関しては，“主人公”となっている動物では圧倒的に「鳥類」が多く，コウノトリ・白鷺・雁などがあげられている。飛来することを見た狩人や村人（＝観察者）が発見者であり，人びとに伝えた人でもある。獣類では，猿・狐など地域的に限定されており，猿が実際に温泉を利用している状態を観察できるのは，長野地獄谷野猿公苑などの特定箇所を除くとかなり困難である。鹿の温泉利用を観察するのはさらに困難であるが，鹿教湯，山鹿など名称に「鹿」の文字が用いられている温泉は存在している。

2．五頭温泉郷の温泉発見・開湯伝説に関して (1)

1) 行基の業績

主要温泉の発見・開湯伝説において，最も多く登場する人物は前記した通り「行基」であり，実際に活動の拠点としていた近畿地区外の東北・新潟・北陸などの温泉に関する発見者としてあげられていることが多い。

行基 (668 ～ 749) は，現在の大阪市東部の出身で，40 歳頃まで法相宗僧侶として学習するとともに，井戸掘りや土木工事などの実践的な社会事業の知識と技術を身に付つけるとに努めた。その後，「知識結（結＝ゆい，お互いに力を出し合って協力すること）」と称される僧俗混合集団を結成して，近畿中心に貧民救済・治水・土木などの社会事業に大勢の弟子を率いて取り組んだ。また，各地に布施屋（無料宿泊所）を設けるなどの福祉活動を実践していたため，その影響力を恐れた朝廷や政権者などから警戒され，やがて弾圧されるようになり，参加・協力を禁じる布告も出された (731 年以降)。しかしその一方では，行基が指導する社会事業活動や布教活動は，とくに反朝廷・政権的なものではないことも徐々に理解されるようになってきた。

聖武天皇は，740 年に東大寺に大仏造営の令を発したが，国民の理解と協力を得るためには，社会事業面で信頼が高い行基の協力が必要不可欠と考え，「大仏建立事業への協力」を直接依頼することになる。行基はこれを快く承諾し，勧進（寄付を集めると）責任者となることを引き受けた。社会事業での実績から人びとから絶大な信頼があった行基はその時 72 歳を迎えていたが，勧進責任者となったことによって，大仏建立事業への国民の協力は急速に進み，752 年「大仏開眼供養」を行うことができた。朝廷はその功を称え，行基に日本最初の「大僧正位」を贈った（行基は２年前に逝去，なお唐に倣って日本が「大師号」を採用したのは 866 年で最澄に伝教大師を贈っている）。

行基は，近畿を中心として数十もの寺院を開らいたとの史料が残っているが，その他に北は青森から南は宮崎に至る約 600 寺に「行基が開基した」との伝承されているが，いずれも“追慕による伝承”と考えられている。なお，行基の本来の活動である社会事業に関しては，貯水池の掘削指導３か所，橋梁架橋指導２基，港湾建設５ケ所とされており，それらについては資料的裏付けがあるものも認められている。

2) 五頭温泉郷の温泉発見・開湯伝説における行基

温泉発見・開湯者として最も多く登場するのが行基であると記したが，歴史的史料に行基が温泉発見・開湯に関わったとの記載は存在していない。また，行基の活動拠点であった近畿より遠く離れた地域に発見・開湯伝説が残っているのが特徴である。

五頭温泉郷の温泉発見・開湯伝説として「734（天平５）年に来村，海満寺（現在の華報寺）を創立する」と記されているが，前記したように，行基の“活動史”からみると明らかなように，朝廷などから弾圧を受けながらも活動を続けていた時期でもあり，かなりの日数をかけて出湯温泉を訪れるのは余りにも不自然である。

したがって行基による華報寺創立伝説は，日本において７世紀頃から，人びとの病と苦悩全般を取り除いてくれる如来（仏）であるとして崇拝されるようになった薬師如来と行基とを重ね合わせ，国民的崇拝の対象となったことを意味したものと考えることができ，後の時期になって，行基が果たしてくれたであろう役割に対し，深い敬意を込めてつくられた伝説と解するのが妥当である。

3．五頭温泉郷の温泉発見・開湯伝説に関して (2)

1) 空海の活動概観

真言宗開祖空海 (774 ～ 835, 後の弘法大師）が若い時代に修行した四国各地の所や寺院を後に（鎌倉時代以後）整備して，番号を付して順に訪れることが「遍路」と称されるようになり，江戸時代半ば（17 世紀末頃）からは，社会の安定と生活水準の向上さらに遍路に関する情報増加（ガイドブック相当の書籍発行）により庶民層に広がった。その後も紆余曲折はあるが遍路は現代に続いており“国民的行事”ともなっている。

空海は遣唐使随員として唐に赴き (804)，修行後に密教を伝授されて 806 年に唐から帰国すると直ちに観世音寺（太宰府）で，翌 807 年には京都・高雄の山岳信仰の拠点であった神護寺に本拠を移して布教を開始するとともに，桓武帝の次男で 52 代天皇となった嵯峨帝に拝謁し信頼を得た。そして９年後（ 816），空海は嵯峨帝から高野山一体の土地を拝領して「金剛峰寺」を建立する。さらにその７年後（ 823）には，「東寺」を拝領して真言宗布教の京の拠点とした。

2) 空海から「弘法大師」へ

空海は高野山で入定（逝去，835 年）するが，多くの弟子たちは教えを守り真言宗の布教に努めた。その後，東寺をはじめとする関係者の長年にわたる朝廷等への働きかけによって，空海に「弘法大師」の称号が贈られた（ 921 年）が，それは没後 86 年後のことであった。

最澄が没後 44 年に贈られていることと比較すると，空海が第 52 代嵯峨帝の絶大な庇護を受けたことに対する反発が影響したとされている（「大師」称号を誰に贈るかは朝廷が直接関わる高度な政治問題である。なお日蓮上人に「立正大師」が贈られのは没後 670 年の 1922＜大正 11＞年であった)。

空海は弘法大師と称されるようになったことで，それ以前と明らかに異なる存在となるが，そこにはその時代の社会的条件も関係していたものと考えられる。空海には没後も生存中と同様に朝・夕の食事が捧げ続けられていたが，やがては「弘法大師は逝去しておらず，回国教化を続けている」とする“入定信仰”が生まれるようになってきた。さらに 11 世紀になると「現在も人びとと巡礼を続けておられる」という「同行二人」の考え方が広がるようになった。

当時，釈迦が没して二千年が経過すると社会の秩序が乱れる「末法の時代」が到来すとの考えが広く流布されており，当時の暦にあてはめると 1052 年が末法元年にあたるされ，死後の世界に極楽浄土を求めようとする考えがみられるようになった。全盛を誇っていた藤原頼道が「宇治平等院」を造営したのも 1052 年のことであった。

また日本には，古くから「神」と「仏」とが共存しており，両者ともに信仰対象とするという「神仏習合思想」が広く受け入れられており，平安期には「神の本地（本体）は仏であり，（日本の）
人びとを救うために神として現れた」とする「本地垂迹説」が支持されていた。「神仏習合思想」は現在も人びとの生活の中に存続しており，願い事をする際に「神様・仏様・○○様」と言うことは広くみられるところである。このような混迷し，不安に満ちた社会において，人びとが頼れることの出来る唯一絶対の存在として，弘法大師は多くの人びとから崇敬の対象となったものと考えることができ，弘法大師は他の宗教家たちとはは異なる，宗派を超えた存在であり，「大師＝弘法大師」とする見方は現在も続いている。

3) 五頭温泉郷の温泉発見・開湯伝説と空海（弘法大師）

行基の場合と同様に，空海あるいは弘法大師が発見・開湯した温泉は全国各地に存在しており，その総数は数十か所に達している。

五頭温泉郷は「出湯（でゆ）」「今板」「村杉」の３つの温泉から構成されており，開湯が出湯と今板とは同じ 809 年で，華報寺を中心として温泉宿が構成されている出湯の先に今板がある。村杉はその約 350 年後の鎌倉時代と室町時代の間の「南北朝時代」にあたる 1335 年に開湯されており，今板のさらに奥に位置している。

五頭温泉郷の開湯伝説は，まず行基によって海満寺（現在の華報寺）が創られ，75 年後に空海により開湯，という二人のビッグネームが伝えられている温泉である。因みにに行基が発見し，空海が開湯したとの伝承が存在する温泉は，関金温泉（鳥取・倉吉）と芦ノ牧（福島・会津若松）であるが，ともに確かな記録等は存在していない。

一般に，温泉の発見・開湯伝説に，史料等による裏づけがあるものはほとんど存在しておらず，とくにビッグネームとされる著名な僧侶による場合は，その活動年表と照合すると伝聞や地域の人びとの“そうあってほしい”との願望によるものと考えられるもがほとんどである。中伊豆地区には，「空海は独鈷を用いて，大同２＜ 807 ＞年に靈湯を湧出させた」との開湯縁起が有名な「河原の湯」があるが，空海が帰国後の年譜を参照するとこの時期に伊豆に赴くことには無理があり，さらにこの逸話については，空海が唐に赴く前の時期（ 798 年）に，門弟の杲隣（こうりん）が開基したとの史料が残っている。また修禅寺は以前は真言宗寺院であったが，後には臨済宗（さらに曹洞宗）の寺院に宗旨が代るが，寺の裏山か

れている。

五頭温泉郷の開湯伝説に関して興味深い資料があり，郷土史資料である『五頭山華報寺温泉沿革史（1941 年刊)』は五頭山開山について，唐からの帰国時（806 年８月 10 日と明記）に，「(現在阿賀野市の）天堂宝蔵院に着き，五頭山に登り…」と記載している。さらに４年後（809) に再訪して「五頭山大権現に菩薩五尊を勧請して五頭山を開山した」と記載している。しかし公務で唐を訪れていた者が，日本の帰港地からはるかに離れた新潟の港に真っ先に向かうとするのには無理があることは言うまでもない。空海が五頭山を訪れたことに関し笹神村（2004 年周辺町村とともに阿賀野市に併合）の郷土研究史には「809 年，空海が初来村し五頭山を開山」と記されており，空海が「809 年五頭山開山に関わった」ことについては前記資料と同様な記載となっており，いずれも五頭温泉郷には長い歴史があり，その発見・開湯には偉大なる聖人が関わっていたこと伝えるものとなっている。

4．五頭温泉郷を発見・開湯時から現在まで育ててきた“モノ・コト”再考

1) 出湯温泉・今板温泉

温泉の発見・開湯に関して，“温泉社会学的視点”から考察する場合の課題は，開湯時期が何時であったかや温泉資源の量と質とが時代的にどう変化してきたかなとについて客観的に明らかにすることではなく，地域とその周辺の人びとが温泉をどのようなものとして受け止め，どのように利用したかになどについて，検討することである。

五頭温泉郷の発見・開湯に関する伝承などについて，奈良・平安時代に活躍した二人の偉大な僧侶の活動を紹介し，その関わりについて述べてきたが，五頭温泉郷が古い時代から今日に至まで，地域の人びとの強い敬愛の対象となってきたことが分かる。

その理由には，新潟（県）ではあるものの上越地方のような豪雪地帯ではないことも関係しているが，最大の理由は，五頭山がもっている魅力であると考えられる。海岸からさほど遠くはない所に五つの峰があり，それらはいずれも峻嶮な高い山ではないが，誰でもが楽に登れるとも言い難い。しかし頑張れば多くの人が頂に到達することは十分可能である。当時の人びとにとっても，五つの峰は気高く，神々しく映っていたに違いない。それぞれの峰は聖なる頂なのであり，頂に到達した人びとは，やがてそれぞれに供養のための地蔵や祈願に関わる石碑などを残すようになったものと考えられる。そして，それらの五つの峰の麓には，自然の恵みである温かい湯とくに疲れをとってくれるだけでなく，元気を与えてくれる湯（温泉）が湧出していたのである。聖なる五つの峰を降って，浸かる（浴びる）ことができる湯もまた聖なる恵みであるに違いないと，経験した人びとは受け止めていただろうと考えることができる、 これらの恩恵に感謝する人びとはやがて，それらがもたされるまでの経緯を，感謝の思いを込めて“伝説”として語り継ぐようになる。そしてその時期までにおいて，その存在と活躍とが知られていた人物が，主人公の役割を果たすようになったものと考えられる。このような解釈は，各地の温泉発見・開湯伝説にもみられるかなり共通性のあるのと言うことができるが，五頭温泉郷の場合，五つの峰の存在と温泉との位置関係からその成立過程をある程度まで想像することができる。

五頭温泉郷の中で最も古い出湯温泉は，「出湯」という名称そのものに温泉湧出の古い歴史が込められており，開湯伝説に関わる海満寺（現在の華報寺）を囲む形で温泉地が形成されていった施設配置からも，神仏と自然に感謝することを基本とした，往時の泉が浮かびあがってくる。とくに華報寺共同浴場には“弘法大師によって開湯”という伝承に，現在でもさほど不自然さを感じない雰囲気が残されている。

出湯温泉は，江戸初期に衰退した海満寺に代って華報寺門前湯となって以後，“弘法大師ゆかりの温泉”として湯治客が訪れるようになり，明治初期には湯治宿が７軒存在したとされている。その後，華報寺に古くから設けられていた寺湯が独立して木造洋館に改築され，利用者がさらに増加し，昭和初期には旅館が十数軒に増加している。

1970 年（戦後 25 年）になると，経済成長と生活の安定を背景として，“観光大衆化”が急速に進み，団体やグループによる温泉地への歓楽旅行が盛んになると，出湯温泉にも利用者がどっと押し寄せるようになり，芸者置屋数が新潟県内で２番目に多いとされた時期もあったが，利用者の多くは近辺の人びとであった。間もなく出湯温泉は歓楽旅行目的地からは除かれ，次第に自然の中の静かな温泉地に戻っていった。

現在，出湯温泉には４軒の宿（*) が営業しており，部屋数としては 10 室未満が２軒，10 室１軒，11 室１軒であり，すべて小規模施設であるが，創業 300 年の歴史ある施設や国の重要文化財指定施設からなり，温泉が源泉かけ流しであったり，里山の食材をふんだんに用いた料理など，地域の歴史と自然環境を満喫できる温泉宿ばかりで，馴染み客や長期滞在客も多いとのことである。

近接する今板温泉は“山のなかの一軒宿”を標榜しており，現在は部屋数 14 室の１軒のみであり，静かに，温泉と郷土料理を楽しむ利用者を対象としている。

このように，出湯温泉・今板温泉には古い時代の温泉と地域に対する考え方が，再び戻り，とくに近年は“温泉地としての特徴として”その面がさらに強くなっているように感じられる。このように静かな温泉地を復活させ，維持している地元の方々の努力とくに近辺に存在する“大規模温泉宿泊地”との“棲み分け”を図ろうとしている意欲には並々ならないものがあるように思われる。実際には，静かな温泉地を好む利用者も少なくはないのであり，とくに近年は増加傾向にあるとされている。課題は，このような利用者はまた，それぞれ異なる要望や好みをもっており，それらにどう対応していくかであろう。(* 旅館・部屋数は五頭温泉郷旅館共同組合編『ごずの麓のお宿本』記載によったものである。次項の村杉温泉に関しても同様である。)

2) 村杉温泉

村杉温泉は，出湯・今板両温泉とは発見・開湯年度・縁起ともに異なり，14 世紀前期（1335 年）に足利家の一武将が戦乱を逃れて諸国を流浪し，当地を訪れた際に薬師如来の導きによって発見，傍らに薬師堂を建立したとされる。その後，従者とともに当地に居を移し，薬師堂への参道にさまざまな木を植えたが，とくに杉の木が多く植林されたことから“杉の多い村”として「村杉」と称されるようになったと伝えられている。

江戸時代中頃から湯治場として知られるようになり，新発田藩主が湯治に訪れたとの記録が残されている。入浴すると身体が温まるなどの効果があることが経験的に知られており，江戸中期から明治時代にかけて，多くの利用者が訪れるようになっていた。

温泉成分分析は行われていなかったが，1914 年に新潟大学医学部（現在）に分析を依頼したところ，多量のラジウムが含有されていることが判明して，貴重な有益な泉質の温泉であるとして，一躍有名になり，とくに婦人病に有効と報道された。

その結果，近隣各地から長期滞在に訪れる者が多くなり，自炊湯治客に食材等を提供する市場が立つようになった。まもなく，村杉温泉 15 県の旅館主は共同して村杉温泉乗合自動車組合を設立し，６人乗リのフォードＴ型を購入し，新潟方面からの五頭温泉郷入り口にあたる「水原・村杉間」に定期運行（１日６便）を行って話題となった　その後（1921<大正 10>年６月)，ドイツで林学・造園学を学び，日本で最初の林されている。この講演で述べられた構想は，村杉温泉をはじめとする五頭温泉郷全体さらにより広範にわたる，ラジウム温泉および周辺一帯の自然環境を利用するという雄大な計画であり，壮大なマスタープランであるとともに土地利用に関する具体的な図面が添付されるなど細部にわたっている面もあったが，実行に移されるには至らなかった。

本多氏による地域風景計画案の中には，それを指針として地域開発に取組み，成果をあげたものもあり，1924 年に大分県由布院市で行った「由布院温泉発展策」に対しては別府温泉の発展に活躍した油屋熊八と盟友中谷巳次郎に多大な影響を与え，これを手がかりとして油屋らは由布院温泉の開発に取組み，後に成果を収めるようになる。

近年，村杉温泉においても，本多氏が提示した地域資源と風景の利用方策を見直し，提示されたアイディアやプランのうち，活用できる事柄を参考にしようとする機運がみられる。このような活動は“温泉の現代的意味と効用の再検討”に通じるものであり，さまざまな角度からの協力が必要であると考えられる。

村杉温泉もラジウム温泉で人気を集めたり，新しい交通機関を導入することで話題になるなどの歴史がある。現在は６軒の宿が主体となっているが，客室数 27 室の中型施設が１軒の他は，10 室の施設が２軒，10 室未満の設が３軒となっており，施設構成と特徴等に関しては出湯温泉とほぼ同様であり，「ゆったり」「のんびり」「静

かに」などの言葉があてはまる温泉となつている。紆余曲折を経て，「自然と親しみ」「ゆっくりと心身を癒す」など，古い時代の温泉が担った機能を再現しているように感じられる。

むすびにかえて

五頭温泉郷をはじめ瓢湖なども含めてこの地域一帯は，「五頭連峰県立自然公園」に指定されている。さらに五頭温泉郷は「国民保養温泉地」にも指定されており，その中には古い時代からの温泉と地域に対する考え方が，現在に続いているように感じられるものも少なくはない。

今回，当地で開催される「健康と温泉フォーラム 2018」にサブタイトルとして付されている“地域で活かす温泉ー生命と心のサンクチュアリー”はとても興味深い文言である。言うまでもなく「サンクチュアリー（Sanctuary)」とはヨーロッパの中世において“法律（世俗的な力）が及ばないところ”とされる教会とくに祭壇などの聖域を意味していた。観光や温泉に関係するものとしては「自然公園法（1957 年制定)」に記載されており，鳥獣保護法および狩猟に関する法律にも規定がある。

現在では，「鳥獣保護地」「禁猟区」に相当する言葉として用いるのが，より一般的である。五頭連峰県立自然公園に関連するサンクチュアリーとしてまず思い浮かぶのは阿賀野市水原地区の白鳥が飛来することで知られる「瓢湖」であり，「白鳥渡来地」として 1954 年に国の天然記念物に，2005 年には「瓢湖鳥獣保護区」にそれぞれ指定されている。さらに 2008 年には「ラムサール条約登録湿地」となっている。

白鳥が初めて飛来したのは戦後間もない 1950 年であったが，地元ではすぐに愛護活動に取組み，吉川重三郎氏が毎日定時に餌を与え続けたことによって４年後（1954 年）に餌づけに成功した。最初の頃は，年間（10 月下旬～３月下旬）に訪れる白鳥は 500 羽であったが，次第に毎年飛来する数が増加し，近年では 5,000 羽に達している。現在は１日３回公認エサ（パンの耳を乾燥させ砕いたものなど）を与えている。毎秋に飛来し，翌春まで“滞在する”白鳥たちは，居住地から瓢湖までの往復の仕方や新潟での過ごし方などが白鳥体内に埋め込まれているのかも知れない。忘れてはならないのは，白鳥が飛来し定住するようになったのは，（前記した）吉川氏をはじめとした現地の人びとの弛まない努力を積み重ねた成果であるということなのである。

温泉利用を通して，人びとが自然の恵みに喜びを覚えたり，平素は忘れがちな人間らしい気持ちや感情を取り戻すことができた時，温泉はその人にとってサンクチュアリーとなりうるのである。そのためには，利用者を迎え入れる立場にある人びとが，ほんの少しだけ“ホストとしての役割”を担うことによって，温泉の効果はさらに高まると考えられる。

ホストとしての役割とは，必ずしなければならないことを意味しているのではなく，利用者それぞれが「して欲しい」と思っていることに気づいた際に，“快く手伝ってあげようとする気持ち”をもつことなのである。ゲストとホストとの心のコミュニケーションをつくるために，どうすればよいかはすべての分野に関わっている。そして，健康と温泉につい考えるにあたっても大きな課題となっている。

健康と温泉フォーラム2018 in 阿賀野市

地域で活かす温泉ー

生命と心のサンクチュアリー、温泉新時代へ

阿賀野市の概要

面積：192.7 ㎢
人口：42, 690 人
世帯：14,40 6 世帯
※人口、世帯数は９月末現在

平成 16年に安田町　京ヶ瀬村　水原町　笹神村が合併して誕生した阿賀野市は、新潟平野のほぼ中央に位置し、南側に大河阿賀野川が流れ、東側に標高 1,000メートル級の山々が連なる五頭連峰を背にして形成された扇状地に、6,500ヘクタール余りの水田が広がる穀倉地帯です。県都新潟市から南東へ約 20 キロメートル、新潟市のほか、新発田市、五泉市、阿賀町に接しています。

阿賀野市案内地図

編集・発行　　特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム
〒151ー0066　東京都渋谷区西原１ー５０ー２
☎・FAX　03-6804-8575
E-mail info@onsen-forum.jp　http//www.onsen-forum.jp
制作　ryoondo-tea　涼音堂茶舗
E-mail info@ryoondo-tea.jp　http//www.ryoondo-tea.jp

©The Forum on Thermalism in Japan printed in Japan

表紙の絵＜五頭立秋＞

小林春規プロフィール
Kobayashi,Haruki

1953　阿賀野市（旧水原町）に生まれる。
1956　美術教師であった父の影響で版画を始める。
1970　日本アンデパンダン展出品以後毎年出品
1971　最初の個展（新潟，３ヶ所）
1972　京都に住み表具の仕事と版画制作を続ける。
1978　木版画個展（京都平安画廊）
1980　インターグラフィック’８０年展（ベルリン）
1983　木版画個展（新潟・京都）→1990 年より笹神に在住。
他、個展（新潟絵屋・考古堂ギャラリー、小さな美術館季、みずさわ画廊など）